

たからである。今では、有難いことに、露西亞にも教養のある人たちが現れ始めた、そして何よりも先に、子供を持ち、子供を生むといふことは昔も今も、世の中で最も大切な、最も眞面目な仕事であることを理解するやうになるに相違ない。『誰に智慧が足りなかつたか、どうぞ聞かせて呉れ？』歐羅巴では現代の女は子供を生まなくなつた。そこが足りないのである。露西亞の女に就ては暫く言はないことにする。

——どうして生まなくなつたと言ふのだね？序でに附加へて置くことは、この人間には一つの意外な不思議があることである。彼は子供を可愛がる。いたいけ盛りの、『まだ天使の御姿にある。』小さな子供が好きである。さういふ子供たちに跟いて駆廻る程に好きである。エムスでも、彼はそれで有名になつた位である。何よりも好きなのは、人たちが子供たちを連れて来る並木路を散歩することである。彼は子供たちと馴染になつた、一歳になるかならない赤ん坊とさへも馴染になつて、仕舞ひには多くの子供が彼を見知り、彼を待ち、彼に笑ひ掛け、彼に手を出すやうにまでなつた。獨逸人の乳母に會ふと、赤ん坊は幾つだとか幾ヶ月だとかと訊いて、赤ん坊を賞めちぎり、間接に乳母をも賞めて、彼女を喜ばせたりするのである。つまり、これは彼の煩惱なのである。毎朝、鑛泉や、並木の中で、群衆の間に、手に辨當を提げ、肩に小さな喇叭を掛けた、みなりのきちんとした、學校へ行く子供たちが幾かたまりにもなつて現れる時は別して狂喜するのが常であつた。眞個に、それは好い子供たちで、殊に四ツか五ツか六ツかで可愛い盛りであつた。

——*Tel qu'il vous me v'preg* (佛蘭西語。君が僕を見る通り)僕はけふ笛を二ツ買つてやつたよ——と或る朝彼は莫迦に満足けな様子をして私に告げた——あの、學校の生徒にはない——あれ等は大きな子供だ、僕

はきのふ彼等の先生に近づきになるの愉快を得た。珍らしい程、品格のある人だ。だが僕の買つてやつたのは二人の肥え丸んだ兄弟だ、一人が三ツで、一人が二ツ。三ツの方が二ツの方を連れて歩く、どつちも智慧が多い、二人は玩具を持つて、口を開けて、あの無邪氣な、世界ぢうでそれよりも美しいものは思ひ出せないやうな、美しい、子供の歡喜を包んで、天幕張りの側に立停つた。狡い獨逸女の商人が、僕が見てゐると、直ぐにそれと悟つて、いきなりと二人に笛を取らせた。僕は二麻克マックを拂はなければならなくなつた。その狂喜と言つたら言葉には盡せない、歩き廻つて、鳴らしてゐる。これは一時間前のことだが、今も復そこへ行つて見たら、いまだに鳴らしてゐる。僕は、此處の社會を指して、今の處、この社會よりも好いものは世界が與へ得ないと君に言つた。僕は好い加減なことを言つたのだが、君は僕のいふことを信じた、否まないで呉れ給へ、信じたのだ。それどころか、こゝにもつと好いものがある、こゝに完全なものがある。この辨當を提げ、喇叭を掛けて學校へ行くエムスの子供たちの群れ……太陽と子供たちと子供たちの笑ひと辨當とこの子供たちに見惚れてゐる世界の金持や貴族の華麗な群れ——凡てが一緒になつて、その美しさは何とも言へない。君は群衆が子供たちに見惚れてゐるのを見掛けたらう。それは彼等の中にある趣味の兆であり、眞面目な心の衝動である。けれど、エムスは素朴である、エムスは素朴ならざるを得ない、それ故エムスはまだ子供を生み續けてゐるのである、併し、巴里は——巴里はもう中止して仕舞つた。

——どうして中止して仕舞つたのだね？

——巴里には *Articles de Paris* (佛蘭西語。巴里品) と言ふ名稱で素晴らしい工業があるが、それは絹や佛

蘭西葡萄酒や果實と共に五十億の償金を支拂ふのに與つて功があつた。巴里はこの工業を非常に尊重して、子供を製造するのを忘れる位、それに營いそんでゐる。巴里に倣つて佛蘭西ぢうがさうである。毎年大臣は議會に向つて『population reste stationnaire (佛蘭西語。人口は動かない)』と、嚴かに報告してゐる。子供は生れない、生れても保たない、その代り——と大臣は自慢して言ひ足してゐる——『老人は保つ、老人は佛蘭西では長命ださうだ。』僕の考へでは、彼等が……佛蘭西が自國の議會を充たしてゐる老人連がくたばつて仕舞へばいゝのだ。併し、彼等が長壽を喜ぶにはいはれがある——砂が少くしか掛らないといふのだ。

——だが僕には君の言ふことが解らない。それにArticles de Parisは何の役に立つのだね？

——事は簡單だ。但し、君は小説家だ、随つて、非常に聰明な、傑出した佛蘭西の作家であり、舊い主義の理想家であるアレクサンドル・デュマ・フィサを知つてゐるだらう？ このアレクサンドル・デュマの後を受けて數箇の良い運動がある。彼は佛蘭西の女が子供を産むやうになることを要求してゐる。且、彼は佛蘭西の裕福なブルジュアシアから出た婦人は、殆ど一人残らず、二人宛しか子供を生まない、二人よりは多くもなく、少くもないやうに生むやう、自分の夫とまよくやつてゐるといふ世に知れ渡つてゐる秘密を頭から素つ破抜いてゐる。二人生むとストライキをやる。而も皆がかういふに、それより多く生むのを厭ふ——この秘密は驚くべき速さで廣まる。子孫も二人づつ出来る、それに二人分の財産は六人分よりも多く残る、それが一つ。二つには、「女性」が久しく保たれる、即ち美と健康が永續する、餘所に出たり、おしやれをしたり、踊りをやつたりする時間を餘計に割くことが出来る。それから、親としての愛や道徳的な方面に關しても、即ち六人よりも二人の方が餘計に愛することが出来るが、六人だと悪座座戯も酷く、

八釜しくて、物を壊したり、叱言ばかり言つてゐなければならぬ……履き物の心配ばかりでも大變で、どの位癪に觸るか解らないなどといふ問題に就てもだ。けれど、肝心なことはデュマが怒つてゐることではない、多いにも少いにも二人きりだといふ秘密の存在を直截に喝破したのに拘らず、自分の満足を得る爲めにも、依然として夫と結婚の生活を續けてゐることである。世界の人口が繁殖することをあのやうに恐れたマルサスも、かやうな手段は夢にも唱道しないであらう。だが如何せん、人間はかういふことには莫迦に溺れ易い。佛蘭西には、世人の知る如く、資産家が——都會のブルジュイヤ、農村のブルジュイヤが恐ろしい數である、彼等にはこれが大切な見付け物なのである。これは彼等の發明品である。併し、この見付け物は佛蘭西の國境を越えるやうになる。もう二十五年も経つと、素朴なエムスも惻巧になつて仕舞ふから御覽なさい。伯林は、この意味に於て、既に恐ろしく惻巧になつたさうだ。併し、よしんば子供は少くなるとしても、若しもブルジュアシア許りで、即ち裕福な階級ばかりで濟み、又若しもこのことに他の一端がなかつたならば、佛蘭西の大臣はいつになつてもこの差別に氣がつかないであらう。他の一端といふのは——プロレタリアである。八百萬、千萬、恐らくは、二千萬のプロレタリアである、洗禮を受けなさい、結婚式も舉げないで、結婚の代りに、「軋轢を避ける爲に」『合理的な社會に』住んでゐる人たちのことである。是等の人たちは子供たちを往來に投出して少しも顧るところがない。ガウロオシヤ(ガウリ・イルをぞんざいに呼んだもの)が生れるが、直ぐに死んで仕舞つて、少しも育たない。育つたところで、養育院か懲治監へ打ち込むのが關の山である。我々が謂ふ所のリアストであるゾラの Le ventre de Paris (巴里の腹)の中に現代の佛蘭西に於ける勞動者の結婚即ち結婚的共同生活に於て鋭い描寫がある。ところが、ガ

ウロオシヤは既に佛蘭西人ではない筈である、然るに、二人宛秘密の中に資産家として生れて来る、是等上流の人たちも佛蘭西人ではないではないか。少くも、敢て私がこれを是認するのは二ツの端と二ツの反對物は一致するからである。佛蘭西は佛蘭西たることを歇め始めてゐる、これが既に最初の結果である。(さあ、この二千萬人は佛蘭西を祖國と惟ふべきであると言へるであらうか?)或は言ふものがあるだらう、一層佛蘭西人が消滅して、人間が残る方が好いと。併し、人間だらうか?人間は人間かも知れない、だがそれは歐羅巴を呑んで仕舞ふ、未來の野蠻な人間である。彼等から段々に、けれど罕として矯むべくもないやうに將來の情け知らずが造られる。その子孫が肉體的に悪くなり、弱くなり、醜くなることには疑ひがないと思ふ。肉體の脊後には精神が引かれて行く。これはアルジュアの王國に生ずる果實である。私の考へでは、一切の理由は土地である、即ち地面であり又現代の私有權としての地面の配分である。僕はこれが然るべき以所を君に説明しやう。

四 土地と子供

——土地が見てだ——と私の僻論家は續けた——僕は子供から土地を離さない、僕にはどうしてか、獨りでにさうなるのだ。但し僕はその譯を君に話すのは厭だ。よく考へて見給へ、合點が行くから、數百萬の貧民には土地がない、さなくとも土地の鮮い佛蘭西では殊に酷い——従つて彼等には子供を生むべきところがない、それで餘儀なく地下室で生む、がそれは子供ではない、その半數は自分の父を呼べない、他

の半數は母を呼べないガウロシヤたちである。子供の生るべき處は地面の上で、舗道の上ではない。僕は知らない、それが氣に入るものであるかは知らない、だが今の處、佛蘭西では子供を生むべき處がないのだ。僕の考へでは、工場で働けど、工場も法律ばつた物だ、それですき耕された土地の傍らに生れるものに決まつてゐる。そこに工場の法律があるのだ。けれど、銘々の職人は、どこかそこらに、黄金の太陽と葡萄樹との下に自分の園が、いや共同の園があつて、この園には舗道から連れて來たのではない、素晴らしい女子である彼の妻が住んでゐて、彼を愛し、彼を待つてゐる、妻と一緒に彼の子供たちが馬の遊びをしてゐる、そしてみんなが自分の父を知つてゐるのだといふことを辨へなくてはならない。On the other hand (佛蘭西語。何といつたつて。)正直な、丈夫な子は仔馬と一緒に生れるものである、正直な父親は、若し幸福を願ふならば、これを知つて置くべきである。彼はそこへ稼いだ金を持つて行くやうになつて、舗道で拾はれた牝を相手に居酒屋で呑んで仕舞ふやうなことはしなくなる。そして、この園が萬一の場合、佛蘭西のやうに土地の鮮いところでは)彼の一家を養ふことが出来ないかも知れないから、工場がなくては立ち行かないだらうが、併し、彼は、少くとも、そこに彼の子供たちは土地や樹木や、彼が捕へる鶉と共に育ち、學校に學び、その學校は畑の中にあり、又彼自身は自分の生涯を働き盡して、そこへ憩ひに、それから往生しに歸つて来る。或は養ふに充分かも知れないぢやないか、それに工場はちつとも恐れることはない。又工場は園の眞中に建つかも知れない。つまり、僕はさういふことがどんな工合に行はれるか知らないが、併し、それは實現されることである、園は出來て来る。僕の言葉を百年後にでも想ひ出して見給へ、又僕がかういふことをエムスで、人工の園で、人工の人間たちの中で君に論じたことを想ひ出して見給へ。

僕の思想なるものゝ全體を言へとならば、子供といふものは、即ち正眞の子供は、いや人間の子供は舗道の上ではなくて、地面の上で生れなくてはならぬと言ふのだ。後になつて舗道に住むのはいい、けれど國民は、その大多数に於て、穀物と樹木とが成育する土地の上で、地面の上で生れ、又昇天しなければならぬ。然るに歐羅巴のプロレタリアは、今では、残らずが——一から十まで舗道である。園に於ては、子供たちはアダムのやうに地から躍り上つて、まだ遊びたい盛りの九つ位から工場へ這入つて、旋盤の下で脊骨を挫いたり、ブルジュアが拜んでゐる、卑しむべき機械の前で頭を鈍らせたり、數限りのない瓦斯管の火口で推理力を減ほし、又ソドムも知らなかつた工場の墮落で精神を腐らせるのである。それが九つになるかならない男の子である、女の子である！僕がどこかで未來といふものゝ種子が思想を見ることが出来るとするれば、それは、我々の露西亞に見るのである。露西亞には今日まで民衆の中に一箇の主義が毀されず存在してゐたからである、即ち土地は民衆に取つて凡てであつて、彼等は地中から、又地上から凡てを抜き出すといふ主義である。これは今でも、民衆の大多数が抱いてゐるものである。けれど、肝心なことは、これが常規の、人類の法則であることである。地中には神聖なものがある。君が人類を、もつと良いものに生み變へたいならば、殆ど獸から人間を造ると同じやうなものだが、彼等に土地を分配してやり給へ、さうすれば目的が達せられる。せめてもの仕合せだ、露西亞には土地とオプシチナ（土地を有する團體。）がある。僕は、地中に於けると、又地中から来る秩序は到る處に、人類の中にあると思ふ。各國のあらゆる秩序は——政治にしろ、社會にしろ、一切の秩序は國內に於ける地質や土地所有の性質と關係がある。土地所有が構成された性質の中にはかの一切が構成されたのである。僕はをも、又何をも責

めはしない、そこには萬國の歴史がある——我々はそれを理解してゐる。我々は、土地の同意に依つて、まだ廉價に農奴制から脱れたと思ふ。僕はこの同意を以てほかの一切を解釋する。この同意——これが又民衆の精神——我々の中にそれがあつたことを今日までもボツウギン（西歐崇拜者の一人。）の輩が否定してゐる所の精神の一つではないか。是等の吾が鐵道、是等の新しい吾が銀行、會社、信用——是等はみんな、まだほんとに微々たるものであると思ふ、僕は吾が鐵道の中では要兵上の鐵道丈けしか認めることが出来ない。こんなものは取引所の遊戲に過ぎない、猶太人が顛へ上つた切りだ。君は笑つてゐる、君は不同意だらう、が僕はこの間、一人の地主がこの世紀の中頃に書いた記録を読んだ、その地主は、二十年代（一八二〇年代）のこと。農奴制はロマノフ家が君臨する前より存在し、アレクサンドル一世の一八〇三年に農奴の『釋放』に關する手續と條件とを規定した勅令が發布され、その後幾多の研究や審議を経て、一八六一年二月十九日に農奴『解放』令が署名され、次で三月五日に發布された。既に自分の農奴を釋放したいと思つてゐたのだ。その頃は、これは珍らしい話であつたのだ。所で、彼は田舎へ行つて、そこに學校を創め、百の子供に教會の合唱を教へ始めた。隣りの地主が、彼のところへ來て、合唱を聞いて言ふのに、『君はうまいことを考へついたもんだ、かうして教へ込んで仕舞へば、屹度、合唱の買手がつく。これは誰でも好きだ、いい金を出すだらう。』して見れば、父母から離れた許りの小さな子供たちの合唱を、『一と纏め』に賣ることが出來た時分のことだから、農民を釋放するなどは露西亞の地には途徹もない奇蹟であつたのだ。乃で、彼はこの奇蹟に就て百姓等に語り始めた。百姓等は聴き終つて、驚いた、驚き入つて仕舞つた、暫くは互ひの間で語り合つてゐたが、聽て彼の傍に寄つて、『では、土地はどうなります

か？」「土地は俺のだ。お前たちには小屋と屋敷をやるが、土地は俺に、お前たちが、毎年、野良のしまひをするのだ。』彼等は頭を掻いた。『いや、それなら舊のやうして戴く方が宜しいございます、私どもはあなたのもので、土地がわしらのものと。』勿論、それは地主を驚かした——野蠻な者どもであるわわい、精神が墮落してゐるものだから自由をさへも欲しがらない、この、人間の第一の幸福を……と呟いた。後に、『わしどもはあなたのもので、土地はわしらの。』と、いふ文句は——いや、定義といつた方がいい——みんなに知れ渡つて、誰も驚かなくなつた。だが併し、最も肝心なことは、歐羅巴と較べたら、このやうな、『不自然な、突飛もない。』歴史の理解がどこから現れ得たものであらうかといふことである。而も、その時分だ、『眞個に、我々の中には、教養のある人たちの注意に値ひするやうな民衆の精神があるだらうか？』といふことに就て識者の間に最も激烈な戦ひが行はれたのは。いや、僕の言を許すなら、露西亞人は抑々の初めから、土地を措いて自己を聰明することは出来なかつたのだ。土地のない自由を探ることを欲しなかつたのを見ても、土地は露西亞人に取つて最初に置かれ、凡ての根底に置かれてゐたのである。土地は——凡てである。土地からほかの一切が来るのである。即ち自由も、生命も、名譽も、家庭も、子供も、制度も、教會も——要するに、此世に貴いものといふ貴いものの凡てが出来るのである。この定義からオプシチナの如きものを保つてゐることが出来たのである……

五 露西亞に取つて獨特な夏

豊くる日、私は私の變物に言つた——君は子供のことを論じてゐるが、僕はこの間公開堂で、此處の露西亞人が寄つてたかつて讀んでゐる露西亞の新聞を讀んだが、その中に、人たちが幾つもの郡を擧げて滅びて行つた、あの勃牙利にゐる勃牙利女の或る母親に關する通信を讀んだ。彼女は老婆である、或る村で命は全うしたが、狂氣の如くになつて、焼け跡を彷徨つた。人がどうしたのかと訊き始めると、彼女は普通の言葉で話すことは出来ないで、右の手を頬に押つ着けて、歌を唄ひ出す、節をつけて、自分には家と家族があつたこと、亭主があつたこと、六人の子供があつたこと、上の方には娘があつて、自分の孫があつたことを歌になつてゐる詩のやうにして語るのだ。殘虐者がやつて來た、彼女の翁さんの家を焼いた、彼女の子供たちを斬り苛んだ、小さな娘を強姦した、他の美しい娘を連れ去つた、赤兒らのおなかにだんぴらを突刺し、それから家に火を放つて、物凄しい炎の中に投じた、彼女は始めこの有様を眺めてゐたのだ、又娘たちの叫喚を聞いてゐたのだ。

——うむ、僕も讀んだ——と私の變物は答へた——珍らしいことだ、珍らしいことだ。肝心なところは詩だ。露西亞では、露西亞の批評家は詩を賞めることもあつたが、併し、いつも、詩といふものは悪い道樂の爲に作られたものだと思ふ傾きがあつた。自然の敘事詩を、謂はゞ、生れた許りの姿を研究したら面白いだらうな。藝術の問題だ。

——よし給へ、そらを使つては不可ない。但し、僕が見た所、君は東方問題を語ることは好まないらしいな。

——いや、僕も寄附をした。僕は眞個に東方問題には虫の好かないことがある。

——一體何がね？

——さあ、愛の過剰とでもいふか。

——澤山だつてばね、僕の信する所……

——知つてゐる知つてゐる。言つて仕舞はなくてもいい、君の考へる通りだ。のみならず、僕は抑々の始めに寄附をしたのだ。見給へ、東方問題は、實際に、今日まで愛の問題に過ぎなかつた、又スラヴ主義者から出たものである。眞個に多くの人たちに愛の過剰に乗つて出掛けたのだ、去年の冬、ヘルツェゴヴィナなどは殊にさうだ。愛の過剰な經歷が幾つも編まれた位である。僕は何にも言はない、それに、愛の過剰は自體が最も立派なもので、併し、返つて乗り殺すこともあるからね、僕はそれを春のうちから怖れてゐたのだ、それだから信じなかつたのだ。この後、夏になつて僕は此處でさへも、我々からこの親誼が不意に飛び離れて仕舞ひはせぬかと怖れてゐた。けれど今は——もう怖れはしない、それに露西亞の血は既に流された、流血は尊いものである、結合させる力のある物である！

——果して君はほんとに、我々の親誼が飛び離れると思つてゐたのか？

——罪障のある人間のことだ、思つてゐた。又どうして豫想せずには居られやう。けれど今はもう豫想してはゐない。此處でさへも、ラインから十露里ツェルスタ（一ウエルスタは九町なにがし）は離れてゐるが、白都ベルグラーから報道が来たではないか。白都でどんなに露西亞を責めてゐるかを親しく聞いて来た旅行者も現れた。僕自身も『Temps』や『Debat』で、土耳其人が塞耳維へ闖入してから後、白都で、『チエルニャエフ（露西亞の司令官。）を葬れ！』と、叫んだといふことを讀んだ。併し他の特派員や目撃者は、反對に、こんなことは嘘

で、塞耳維人は露西亞を崇敬して、チエルニャエフに凡てを期待してゐると確言してゐる。僕はどつちの報道をも信する。どつちの叫びも、屹度、あらざるを得なかつたのだ。新しい民だ、兵隊がないから、戦ふことができない、義心が溢れてゐるが、事務の暇が毫しもない。チエルニャエフは軍隊を組織するの要に迫られたが、彼等の大部分はかやうな期間に、又かやうな事情に際して軍隊を組織する目的の何者であるかを解することは出来ない、僕は思ふ。後になれば解するだらうが、その時は大事件が到来する時なのだ。のみならず、最も確固たる、謂はゞ、大臣級の連中の中にも、露西亞は眠つてゐるがどうして彼等を自分の権力に従へやうか、彼等に依つて政治上の勢力を強めやうかと眺めてゐるのだと信じてゐる人物があるかも知れない。さういふ譯で僕はかういふ事が露西亞人の友愛心を冷却させはしないかと怖れてゐたのである。所が多くの露西亞人にも意外なほどにあべこべになつたのである。露西亞の全土が遽かに口を開いた、遽かに肝心なことを言つたのである。兵士も、商人も、學者も、神さまの婆さんも——皆が異口同音に。そこには、攻略の攻の字もないではないか、何れも『正教の爲』と言つてゐる。且、正教の爲になけなしの身錢を切る位のことではなく、直ぐにでも自分の首を持つて行かうと覺悟してゐるのである。『正教の爲』といふ、この二字は現在でも、將來でも、非常に大切な政治上の定義であるのだ。否、これは我々の未來を語る定義であるといふことが出来る。『攻略』といふ響がどこからも起らないことは露西亞の本領である。歐露はいつかなことでも、これを信することが出来ないだらう、何故ならば、歐羅巴自身が攻略を餘所にしては行動することが出来ないだらうから。従つて、我々に反對する歐羅巴の叫びに對して彼はいふことは出来ないのだ、嚴密な意味に於いてだ、君はそれを知つてゐるか？（つまり、今度は歐

羅巴と決戦が始まつた譯だ。この決戦は一から十まで不可解から起つたのだ。露西亞は歐羅巴に取つて不可解である。露西亞のあらゆる行動が不可解である。終りまで不可解なのだ。而も露西亞の地はかくまで意識的に、かくまで一致して本領を發揮したことはついぞ久しくなかつたことである。且我々は眞個に、自分の身うちと兄弟とを見出したのである。これは少しも思ひ上つた言葉ではない。單にスラヴ委員會を通じてではなく、全土を舉げて、直接に見出したのである。これが僕には意外なのだ。これが僕にはどうしても信ぜられないやうな氣がするのだ。我々のこの一致はかくの如く全般の、かくの如く、謂はゞ、唐突の一致は、たとひそれを豫言するやうな者があつたとしても、信ずることは困難であらう。さりながら、行はれたことは行はれたのだ。君は今不幸な勃利女の母親に就て話したが、僕はこの夏他の母親も名告り出たのを知つてゐる。それは露西亞といふ母である。露西亞といふ母は新しい生みの子を見出した、子供に就て訴へるやうな、彼女の偉大な叫びが起つたのである。眞個に我が子を見出したのである。眞個に母親の偉大な嗚咽である。これは將來に於ける政治的の偉大な指示である。見給へ、『彼等の母であつて、主人ではないのだ。』新しい子供が、たとひ一つ時でも事の眞髓が解らないで、母親に不満を訴へるやうなことが生じたとしても、母親はこれを聴いたり、見たりすることは毫しもない、只眞に誠のある母親が行はなくてはならない通りに、底ひなき、何事にも堪へ忍ぶ母親の愛を以て慈愛を續ければいゝのである。今年の夏は、我が國の歴史に記録される夏であることを知つてゐるか？一朝にして分明した露西亞の不可解、一朝にして解答を得た露西亞の疑問は幾何だらう！この夏は露西亞人の自覺に紀元を劃したものである。

六 Post-Scriptum(拉典語。追伸)

『露西亞人は恐ろしく奇抜なことがある。』——かういふ言葉を私は、矢張りこの夏、耳にすることを得たが、これを言つた人にも、今年の夏起つた多くの事が意外な又、恐らく、實際に『奇抜なこと』であつたからである。併し、どんな新しいことが起つたのだらう、却つて、外面に表れた凡ての事は既に業にいつまでも露西亞人の心に横はつてゐたことではなからうか？

第一に、民衆の思想が昂まり、民衆の感情が發した——不幸な、虐けられてゐる兄弟に對する愛といふ感情と『正教の爲』といふ思想が……定にこの事にも何か意外なことが發してゐる。意外なことは(併し、凡ての人に意外といふのではない。)民衆が自分たちの偉大な思想——『正教の事』——を忘れなかつたことである、二世紀間の奴隸、状態を暗黒なる無智と近代に於ては醜劣なる墮落と物質主義と我利我利主義と濁酒状態との巷にありながらも忘れなかつたことである。第二に、意外であつたことは、民衆の思想と、即ち『正教の爲』と、露西亞の社會の最も高いインテリゲンツィヤの意見が——我々が曩に民衆から絶縁したものと言つた、あの人たちの意見が翕然として結合したことである。且、吾が言論界が異常な生氣と一致を示した……神さんの婆さんは、スラヴ民族の爲に自分の懐から一哥を與へ、『正教の爲に』と附け加へる。新聞記者はこの言葉をつかまへて眞心のある人たちに對す尊敬を以て新聞で傳へる、君はかういふ論説を讀みながら、彼自身が同じく『正教の爲に』心血を濺いでゐることを感ずるだらう。恐らく何に

も信じない者でさへ、今では正教と『正教の爲』なるものが露西亞の民衆に取つて如何なる眞價があるかを諒解したであらう。彼等はこれが儀式ばつた教會の性質を帯びたものでなく、又他方よりは、*fanatisme* (佛蘭西語。宗教的狂信。) 歐羅巴では現下の、露西亞の大運動をかう言つてゐるが) などでないことを諒解して、これぞ人類の進歩であり、凡てを基督から導き、おのが一切の將來を基督と基督教の眞理に體現し、基督を措いては自分を想像することも出来ない露西亞の民衆によつて解せられる人類の人間化であることを悟つたのである。自由主義者も、否定家も、懷疑家も、社會思想の主張者も皆一齊に、少くとも、大部分は熱烈な露西亞の愛國者となつた。否、彼等は固より愛國者であつたのだ。けれど、我々は今までもそれを知つてゐたのだと我々は是認することが出来るだらうか、いや反對に今や多くの點に於て無益となつた相互の苦い譴責の聲は聞えなかつたであらうか？露西亞人は——眞の露西亞人はこれまで多くの、同じく眞の露西亞人が想つてゐたよりも、露西亞には遙かに多いことが分つたのである。然らば何が是等の人たちを一箇に結合したのか、否、何が彼等は主要なる點に於て前にも分裂してゐなかつたことを彼等に示したのか？、だが問題は、スラヴ思想なるものが、最高の意味に於て、單にスラヴ主義者の獨占を離れ、事情の壓力に依つて、俄かに露西亞の社會の心臟に移り、明確に一般の意識内に煥發し、生きた感情に於て民衆の運動と落ち合つたといふことにあるのである。さらば、『最高の意味に於けるスラヴ思想』とは何であるか？それは第一に、歴史的、政治的その他のあらゆる論議よりも先づ犠牲である。兄弟の爲に自分の犠牲の要求する心である、自由と獨立とに於て弱き者を自分と同等にし、以て基督の眞理に對して、即ち全人類に對する愛と奉仕との爲に、世界の弱者と虐けられてゐる者を擁護する爲に、全スラ

ヴの大團結を建立する目的を以てスラヴ民族の中で最も強き者が弱き者に味方せんとする、自分の心から發した義務の感情である。これは決して理論ではない、否、最も重大な利益を——歐羅巴との平和をも犠牲にする覺悟さへある、現在の無慾な露西亞の同胞運動の中に嚴存してゐるのである——これは事實として、既に凝結したものである、又此の先も——スラヴ民族の總團結は弱者の擁護に對する奉仕よりほかの目的を以て起り得るだらうか？これが然るべき所以はスラヴ民族なるものが、その大部分に於て、自ら成育し、常に苦痛を以て發達したものである。我々は露西亞の民衆が農奴の奴隸状態と無智と壓迫との中にありて偉大なる『正教の爲』と偉なる正教の義務とを忘れず、根こそぎに黙化することなく、又自分の利益ばかりを慮つてゐる頑固な、自己に終始するエゴイストとならなかつたことに驚いてゐるといふことは上に記したが、恐らく、かくの如きがスラヴの魂たる特性であらう。即ち——苦痛の中に意氣が昂り、迫害の中に鞏固となり(政治的に)、隸屬と屈辱との間に愛と基督の眞理を以て相互に結合するのである……

十字架の重荷に疲れたる天の王は、

奴隸の如き姿にて、

懐しき土地よ、祝福を垂れ給ひつつ、

汝が悉くを歩かせ給へり！

露西亞の民衆は自分が虐げられ、自分が幾世紀とも知れぬ十字架の重荷を擔つて来たからこそ、おのが『正教の爲』とおのが苦しんでゐる兄弟を忘れずに、如何にもして虐げられてゐる者を助ける覺悟を固めて奮起したのである。これをば上流のインテリゲンツィヤが諒解したのである、そして赤心を以て民衆の希望に合體したのである、そして、合體すると圖らずも民衆と一致の中にある自己を感得したのである。凡ての人たちを捉へた運動は寛大で、ヒユウマンなものであつた。凡ての人たちを結びつける高尚な思想、凡ての人たちを結びつける正しい感情は民族の生活に於て最大なる幸福である。この幸福が我々を訪れたのである。我々は我々の増大した一致、過去に於ける幾多の不可解明、益強くなつた我々の自覺を感ぜずにはゐられなかつた。社會と民衆とが明かに自覺する政治思想が突如として發現した。機敏な歐羅巴は直ぐにこれを看破した、そして今や多大の注意を以て露西亞の運動を凝視してゐる。我が民衆の中に自覺的政治思想があることは歐羅巴に取つて全くの意外である。歐羅巴は何か新しいものを豫感してゐる、我々には歐羅巴の尊敬の中に成長したのであるから、それに留意しなければならぬ。久しい前から歐羅巴に築き上げられた、露西亞の社會と民族とが政治的にも社會的にも解體してゐるといふ流言や論議は今やその眼前に強い反證を受けなければならぬ。即ち必要な時は、露西亞人たりとも團結することが能きるといふことが解つたのである。且我々の解體力なるものは——若し歐羅巴が依然としてかういふ力の存在を信ずるとすれば——歐羅巴の所信に於ても、自ら他の方向を取り、他の出所を求めなければならぬ。さうだ、この時代を劃して幾多の見方が變更しなければならぬ。要するに、この全般に亘つて一致せる露西亞の運動は民族の成熟が著しい程度に達したことを證明するものであつて、他の尊敬を招かざるを得

ないのである。露西亞の士官は塞耳雜に赴いて、進んで戦死を遂げてゐる。露西亞の士官や後備の兵士は續々とチエルニヤエフの軍隊に投じ、その數は毎日に増加して行く。或者は言ふかも知れない『これは自分の家では何にもすることのなかつたよたもので、どこでも好いから出掛けうとして出掛けた野心家がかばちかの輩である。』と。併し、是等の『一かばちかの輩』は些かも金錢の利得は受けなかつた。(多くの確實な報告に依つても)のみか、多くは出世の半ばにも達せず、殊に職に就いてゐたものなどはたとへ一時の辭職とはいへ、自分の職務の上に随分と不味い破目に陥らざるを得なかつたのである。彼等がどんな人間たちであるにせよ、我々が彼等に就て聞いたり讀んだりすることはどんなことであるか？彼等は數十人づつとも戦死する、そして、自分の爲すべきことを英雄のやうに果してゐる。チエルニヤエフが組織したこのスラヴ(茲にスラヴといふはセルビヤ人、ヘルツェゴヴィナ人等のスラヴ民族を指すものである。)の新しい軍隊等をばどこまでも頼りにするやうになつた。是等のスラヴは歐羅巴に露西亞の名を稱へ、自分の血を以て我々を兄弟を結びつけるのである。この勇ましい流血は永劫に忘れられないものである。否、これは一かばちかの輩ではない、彼等は自覺して新しい時代を始めてゐるのである。彼等は歐羅巴の前に披瀝した露西亞の政治思想、露西亞の希望、露西亞の意志の敢行者である。尙一つの露西亞の人格が凝結した。嚴肅に雄大に従容として凝結した。——それは將軍チエルニヤエフである。彼の活動は、必らずしも幸多しとは言ひ難いけれども、全體として見れば今までの處、明かに彼の捷利が多い。彼は塞耳雜に軍隊を組織した、彼は嚴肅、不撓、鞏固たる性格を發揚した。加之、彼は塞耳雜に赴くに及んで、既に露西亞で贏ち得た武名と、従つて、自分の將來とを嗜して掛つたのである。つい

此の頃確定したことであるが、塞耳維で彼は單に一箇の部隊に長官たることを承諾したが、最近になつて漸く總司令官の職に任ぜられたのである。彼が率ゐて出陣した軍隊は民警や、一度も銃を見たことのない新兵や、今まで銃を持つてゐた許りの公民から成つてゐたのである。リスクは非常に多かつた。成功は疑はしかつた、これは寔に偉大な目的の犠牲であつた。軍隊を組織し、これを訓練し、出来るだけ矯正して、チエルニャエスは益に鞏固に、益々大膽に行動し始めた。彼は非常に目覺ましい捷利を博することが出来た。最近、彼は頑強なる敵の襲撃を蒙つて三度び退却するの己むなきに至つた。けれど、軍隊を傷めず、意氣も挫けずに退却したのであるが、そのうちに「捷利者」を攻撃する勇氣のなかつた堅固な陣地を占領した。現在の状態を以て察すれば、チエルニャエフ將軍は纔かに自分の主要な行動を始めたのである。但し彼の軍隊は、もうどこからも援助を待つことは出来ない、然るに敵軍はまだ兵力を増加する餘地が充分にある。加ふるに、塞耳維政府の商量は彼が自分の大業を成就する妨礙になる。さりながら、彼の人格は確固として明瞭な意義を有するやうになつた、彼の軍事に關する才能は議論がない、而も彼は生來の性格を高潔なる魂の衝動とを以て、露西亞の願望と目的の高處に立つてゐることは疑ひを容れる餘地がない。けれど、チエルニャエフ將軍に就ての議論は將來に見なければならぬ。彼が塞耳維へ出發してから、露西亞での聲望は大したものである、彼の名は民衆に知れ渡つた。それには少しの不思議もない、露西亞は彼が露西亞は彼が露西亞の最もいい、最も信實は希望と合致する仕事を始め、自分の行爲を以てこの希望を歐羅巴に聲明したことを諒解してゐるから。今後、その結果が如何にならうとも、彼は自分の仕事をすることが出来るだらう、又露西亞は彼を忘れずに、行末までも愛するであらう。

九 月

一 章

— Piccola bestia

七年許り前、私は一と夏を九月まで、ずつとフロレンスで過ごしたことがあつた。伊太利人の言ふ所に依れば、フロレンスといふところは伊太利中で、夏は最も暑く、冬は最も寒いといふ評判であつた。夏はナポリの方がフロレンスよりも凌ぎよいといつてゐた。六月の或る日、私が主人から借りた下宿に恐慌が起つた——主婦を頭にして二人の女中が、金切聲を絞りながら、だしぬけに私のところに飛び込んで来た。彼女たちはたつた今私の部屋へ廊下から Piccola bestia の匍ひ込んだのを見たのである、それを見つけて出して、どうにでもして退治しなければならぬのである。Piccola bestia といふのは毒蜘蛛のことである。乃

て、同勢は椅子の下や、机の下や、部屋の間々や、諸道具の中を探し出した、戸棚の下を掃き出したり、蜘蛛を嚇かして、おびき出す爲に、足を踏み鳴らしたりした。終ひには、寢室へ飛び込んで、寢臺の下や、寢臺の中や、敷布の中を探し出したが、どうしても見つからなかつた。翌くる朝、部屋を掃いてゐる前に辛く探し出した、そして勿論、即座に處罰した。だがこの前の晩は自分と一緒に部屋に Piccola Bettia が泊つてゐるのだと思ふと極めて不快な夜を過ごさなければならなかつた。毒蜘蛛に喰ひつかれても、滅多に死ぬやうなことはないさうだが、その時とは十五年前にセミバラチンスクにゐた時、一人の哥薩克が毒蜘蛛に咬まれて、治療を受けたにも拘らず、死んで仕舞つたことを知つてゐる。併し、大概は熱病がおこりの發作位で癒つて仕舞ふが、あんなに醫者のゐる伊太利ではもつと軽くて済むかも知れない。だが私は醫者でないから分らないから、夜をあかすのが心細かつた。最初、私はさういふ考へを追拂つて、笑つて仕舞つた、そしてまどろみながら、クジマ・ブルトコフの『車掌と毒蜘蛛』といふ教訓的なお伽噺を(寢に傑れたものである。)思ひ出して誦誦し、それから睡りに就いた。けれど夢は極めて圓らかでなかつた。毒蜘蛛の夢は見なかつたが、ほかの不快な、重苦しい、物凄夢を見て、幾度も眼を覺まし、朝になつて太陽が昇つてから、幾らか好く眠つた。何故に私は今この些細な古い話を想ひ出したかと思ひますか？東方問題が動機なのです！……但し、私は少しもおかしいとは思ひません、御覽なさい、今や東方問題ではどんなことでも書いたり言つたりしてゐるではありませんか！

私にはかういふ事が考へられる、東方問題を携へて Piccola Bettia のやうなものが歐羅巴へ飛込んだ、そして平和と人類と人類の繁榮を愛する凡ての善良な人たちを！……どうかしてこの亂暴な、初期のうち

にある國民と國民との分裂が終る時の明るい瞬間を渴望する人たちの安心を妨げるのだと。眞個に、よく考へて見ると、東方問題を根こそぎに解決すると共に歐羅巴の政治的分裂なるものが根絶し、東方問題なる定義の中には恐らく、歐羅巴の残りの政治問題や誤解や偏見などが見え隠れに包括されてゐるやうに思はれるのである。要するに、何か非常に新しい事が到来するのも知れない、それは露西亞に取つては全く異つた局面である。蓋しこの問題が根こそぎに解決すると共に、露西亞は生れて始めて歐羅巴と和解して、歐羅巴に解るやうになるであらうから。所が、この幸福を Piccola Bettia が妨害してゐるのである。この蜘蛛はいつでもゐたのだが、今は東方問題を持つて部屋の中へ這入らうとしてゐるのである。みんな侍つてゐる、みんな不安に驅られてゐる、何とも知れない悪夢がみんなに蒞んでゐる。みんな悪い夢を見てゐる。かういふ騒亂を醸すのは誰であるか或は何であるか——それを決めることは出来ない、何故なれば、何ともいへぬ一般の狂亂が到来してゐるから。どの人も思ひ思ひにこの騒亂を考へてゐる。そして誰もお互を理解してゐない。但し、恰もみんなが咬まれたやうである。咬まれると直ぐに猛烈な發作を起す。今や歐羅巴では凡ての人たちが、バビロン塔の時代のやうに、お互を理解しなくなつたやうである。何れも自分から理解しないのである。たつた一つの事では結合してゐる、みんな直ぐに露西亞を指す、どの人も、有害な虻蟲はそこから飛び出すものと信じてゐる。然るに、露西亞に於てのみ凡てが明るくてはつきりしてゐるのである。只東方に於けるスラヴの兄弟に就ては大きな悲しみがあるが、それも魂を醒かし、心を高遠にする悲しみである。露西亞には東方問題と關聯して、その都度、歐羅巴とは全く反對の事が起す。凡ての人が前よりも明瞭にお互を理解し、誰でも何を欲するかを正確に感得する、凡ての人が

お互に一致してゐることを感得する、最後の百姓^{カキ}までが最も教養のある人間と同じやうに、何を希望すべきかを理解する。十字架に磔にされてゐる自分たちの兄弟を助けなければならぬといふ立派な、無慾な、寛大な感情が凡ての人を一致させる。けれど、歐羅巴はこれを信じない、露西亞の俠氣も無慾をも信じない。殊にこの無慾といふのが毫しも解らないのである、誰かやうに見えるのである。これが迷ひの種である、凡ての人に厭はしい、凡ての人に呪はしい專柄である、それ故に誰もこれを信じやうと欲しないのである、どうしてか凡ての人を信じまいとさせるのである。『無慾』さへなかつたなら、凡ての事が歐羅巴に取つて十倍も簡単に明瞭にならうものを、無慾であるばかりに闇である、不可解である、謎である、秘密であるのだ！嗚呼、歐羅巴には咬まれた人間がゐるのだ。この秘密なるものは、咬まれた人間から観れば、誰にも腹を打開けず、凡ての人を欺きながら、折れず撓まず、狡猾な沈黙を以て何等かの目的に向つて進んで行くとしか思はれない露西亞のみ包まれてゐるのだ。歐羅巴は、理不盡にも自らを歐羅巴の民族同盟と文明とに引入れやうと努めて來た露西亞と共に二百年も暮して來てゐるではないか。それなのに歐羅巴は常に不吉なことを豫感して、どこから現れたか分らない、又どうしても解決しなければならぬものであるのに、恐ろしい謎として露西亞を邪推してゐたのである。かうして東方問題が起る度毎にこの不可解は……露西亞に關する歐羅巴の誤解は病的な程に増大する許りで、『あれは何者だらう、あの正體は何だらう、何時になつたらそれが解るだらう？露西亞人と、何者だらう？亞細亞人だらうか、韃靼人だらうか？さうならば、少くとも、凡てが明瞭になつていい筈だが、さうではない。さうでないことがさうなのかも知れない、我國がさうでない自分から認識しなければならぬことが存在してゐるのかも知れ

ない。けれど、彼等はちつとも我々と似た所がないではないか……それにスラヴ民族の團結とは何のことだ？これは何が爲だ、どんな目的があつたのだ？この危険な統一はどんなに新しいことを我々に語り得るのだ？』と、いふことは毫しも解決されないのである。結局、以前の通りに、いつもの通りに、『侵略だ、征服だ、不正直だ、誑詐だ、文明を退治しようとするのだ、統一された蒙古の酋族だ、韃靼人だ！』と、いふ自分の物差で解決してゐるのだ。併しながら、露西亞に對する憎惡なるものが自體、咬まれた人たちを結合し切る力がないのである、東方問題が起る度毎に歐羅巴が中外見の纏まつたものから忽ちに、而も明瞭に、私的な個々民族のエゴイズムに分裂し始めるのである。それは何人かが何物かを掠奪しやうと欲してゐるのだから、俺にも寄越してよささうなものだ、さもないと皆が持つて行く、そして俺の分は何にもない。』と、いふ虚偽の思想から生ずるのである。それ故に、この問題が舞臺に現れる度毎に、歐羅巴の舊い、以前の不和と疼痛が強烈に痛み出して、化膿して來るのである。従つて一時でも問題を揉み消さうと欲するのである、——主として露西亞に於て揉み消し、どうかして露西亞を問題から取り除け、露西亞を緘黙させ、呆然たらしめやうと欲するのである。

茲に於て、生れはイスライル人（英吉利の大官ならん）であるピコンスフィールド子爵が或る宴會に於ける演説の中で法外な秘密を歐羅巴に暴露して、チエルニャエフを頭として、スラヴ民族を救ふ爲めに土耳其に進入した露西亞人は、畢竟するに露西亞の社會主義者であり、共產主義者に過ぎない——要するに露西亞に充滿してゐる（かの如き）破壊分子たりし者の集合であると説き、『諸君は余を信じて可なりである、余ピコンスフィールドは露西亞の新聞にて名づく如く、首相にして、是等新聞の論説中に重きをなす者であ

る。余は最初の大臣である。余の手許には秘密書類あり、従つて諸君よりもよく、又明かに多くを知つてゐる。——かういふことがピコンスフィールドの言々句々に洩れてゐる。我が貴族が女皇に要求した時のレンスキイやグレミンの輩を思はせるやうな眼に立つ苗字は彼が自分で案出して作つたものだと思ふ、彼は小説家であるから。断つて置くが、私は先に神祕な *piccola Bestia* の事を書いてゐる時、私は偶と考へた若しも讀者が、私はこの比喩でピコンスフィールド子爵を表現しやうとしてゐるのだと想つたらどうしやうと。併し、さういふ譯ではありません。 *piccola Bestia* は單なる思想であつて人物ではない、それに彼は、 *piccola Bestia* によく似てゐることは認めなければならぬといへ、彼には多大の名譽があるであらう。

その演説の中で、塞耳維が土耳其に宣戦したのは不正直な行爲をしたのだ、今塞耳維がやつてゐる戦争は不正直な戦争なのだと言つて、彼に解らなければならぬ。露西亞の運動、露西亞の感激、犠牲、希望、欣喜に唾を吐きつけて、このイスライル人は、この英吉利に於て新しい、名譽の法官は次のやうに續けてゐる。(文句通りに傳へる。)

「露西亞は、勿論、是等の破壊分子を塞耳維に送り出すのを喜んでゐたのだ、縱令彼等がそこで合體し、結束し、申合せをなし、組織を作り、一箇の勢力を造るに至るといふことは念頭になかつたとはいへ。……」この新しい、脅かす勢力を歐羅巴は注意しなければならぬ。』と、いつて、ピコンスフィールドは、露西亞と東方の來るべき社會主義を以て英吉利の貴族を脅かしてゐるのである。露西亞でも、社會主義に關する余の諷刺を認めるだらう、——と彼は、勿論、自分勝手に、考へてゐる——露西亞を嚇かさなければならぬ。』

蜘蛛、蜘蛛、 *Piccola Bestia* 眞個に恐ろしく似てゐる。眞個に小さな、毛むくちやらな *Bestia* だ！而も、その敏速な走りやう！これは勃牙利人の虐殺ではないか——この蜘蛛これを容したではないか——自ら作つたのだ、彼は小説作家である、これは彼の *chef-d'oeuvre* (佛蘭西語。至上の傑作) である。併し、彼は七十歳である、間もなく土に歸くのだ——自分でもそれを知つてゐる。屹度、彼は子爵を贏ち得た時にどんなに喜んだか知れない、まだ小説を書いてゐるうちから、常にこれを憶れてゐたのだ。かういふ人々は何を信仰してゐるのだらう、夜はどうして眠るのだらう、どんな夢を見るのだらう、獨りの時は自分の心をどうするのだらう？ おお、彼等の心は華麗なもので満たされてゐるのだ！……彼等は、毎日、微妙な、鋭敏な話し相手と一緒に美しい午餐を認め晩になると、最も華麗な、最も高尚な社會で美しい貴婦人が彼等を愛撫するのだ——おお、彼等の生活はかやうに仕合せである、食物の消化は驚くべき程である、夢は赤ん坊のやうに安らかである。此の間、私は土耳其の馬賊バシ・ブズキ(土耳其の馬賊)が二人の僧を磔にしたことを讀んだ——二人は如何なる想像も及ばないやうな苦悶の中に、一晝夜を経て死んだ。ピコンスフィールドは初め議會で一切の苦悶を……最も小さな苦悶をも否認したが、勿論、自分ではそれを知つてゐるのだ、この、二人の磔に就ても知つてゐるのだ、『彼には書類があるではないか。』疑ひもなく、彼は是等の空虚な、醜惡な、汚れた、品の悪い光景を自分の頭から追ひ出してゐるのである、けれど、この、二つの黒い、磔臺の上に乾からびた骸は、最も意外な時に、例へば、ピコンスフィールドが自分の裕かな寢室で、今やつて來た許りの美しい夜會や、舞踏會や、彼がああ紳士やこの貴婦人に言つた美しい、輕快な言葉を想ひ出して、明かな微笑を泛べながら、華膏の園へ去らうとする時、唐突に彼の頭に躍り込んで來

るかも知れない。

『何だ——とビコンスフィールドは考へた——この礫臺の上にある黒い骸……フム……それは、勿論……併し、國家は個人ではない、國家は感覺の爲にその利益を犠牲にしてはならぬ。況や、政治の事には無慾な寛大などがあつて堪るものか。』……と、ビコンスフィールドは考へる……『如何にも調子よく、氣を新たにするやうな美しい言辭がよくもあるものだなあ。實に實に國家ではないか……だが併し、俺は寝るとしやう……フム、何だつて二人の坊主位が、坊主か？彼等の言葉で、これは les popes だそんな目に遭ふのは自分勝手なのだ、どこかそこらへ隠ればいいものを……長椅子の下へでも……Maf, avec votre permission, messieurs les deux crucifiés. (佛蘭西語。けれども、諸國嬢よ、失禮ですが、二人は礫にされてゐるのです。)君の馬鹿けた冒険にはほと／＼愛想が盡きた、et je vous souhaite la bonne nuit à tous les deux. (佛蘭西語。そして私はあなたがた二人に安らから夜を望みます。)』

そして、ビコンスフィールドは甘い、優しい眠りに落ちる。彼は、自分は子爵で、自分の周圍を薔薇と米蘭オランダと美々しい貴婦人とが取りまいてゐる夢を見續ける。そこで彼は極めて美しい演説をやる、何といふ bons mots (佛蘭西語。好言、美辭。)だ！皆が喝采する、彼はたつた今聯合を押し潰した許りなのである……かういふ安排で、露西亞の大尉も、少將も、揉み苦茶になつた古いフロック・コオトの襟に白い十字架を着けた老年のセバストポオル人や高架索人(彼等の多くをこんな工合に描いてゐる)は何れも社會主義であるといふのだ。勿論、彼等の或る者は酒を飲む、我國もそれを耳にした、士官などしてゐる人間はかういふことには弱いものである、だがこれは決して社會主義ではないではないか。それならば見給へ、彼が戦

場に於て、自分の大隊の先に立つて、露西亞の名を讀へ、自分の模範を以て臆病な新兵をも英雄に改造しながら、如何に華々しく、如何に勇ましく戦死するかを、これでも貴方の考へでは社會主義者といふのですか？母親が手を取つて連れて來た二人の若者は(かういふ事があつたのです。)共產主義者ですか？一家の悴たちを引連れて行く、この老兵士——彼は果してチュレリ(佛蘭西の革命黨が焼いた宮殿。)を焼きたいと思つてゐるのですか？是等の老兵士、ドンから出た是等の哥薩克、衛生隊や野戦教會として従事した露西亞人の諸隊、果して彼等は天主教が銃殺せられやうとするのを見て眠つてゐるのでせうか？是等のキレエフ(愛國の士)、是等のラエフスキイ——これが歐羅巴が顛えなければならぬ、露西亞の破壊分子であらうか？チエルニャエフの如きは、——英雄の中で最もナイイヴな者である、——露西亞では「露西亞世界」の前の發行者である——その彼が露西亞の社會主義の指導者であるといふのですか？チエツ、何たる出鱈目だらう！若しもビコンスフィールドが、これを露西亞風に見ればどんなに不様に、どんなに耽辱になるかを知つたなれば、恐らく、その演説にかういふ馬鹿けた所を入れはしなかつたらうに。

二 言葉、言葉、言葉！

東方問題の解決に関する意見には、我々にも、歐羅巴にも極めて不可思議なものがある。序でだが、新聞界には、我々のにも、咬まれたやうな人口がある。おお、自分の印象を残らず數へ上げるのではない、疲れて仕舞ふ。「行政自治」丈けどもあなたがたの腦を痺痺させるに充分である。勃牙利、ヘルツエゴヴィ

ナ、ボスニヤに回教徒と同様の権利を與へるやうにするとすれば、そこにも、如何にしてその権利を保障すべきかといふ方法を見出さなければならぬか——『それならば、我國は何故に東方問題が終熄しないのか、一向に解らない。』云云といふ者が出て来る。この意見は、世間でも知る如く、歐羅巴では特別の權威を有つてゐる。

要するに、それを實現するのは、再び歐羅巴を創りかへるよりも、泥から水を離すよりも、或はどんなことよりも困難な、こんがらかつた状態を作り出してゐる。のにも拘らず、萬事を解決して仕舞つたと思つて、落着き拂つてゐるのである。否、露西亞は主義に於てのみ、これに賛同したので、その實行は自分は傍觀しやうと欲したのである、それも自分流にである、そして、勿論、空論家諸君、あなたがたには手を温めさせないであらう。『自治を與ふべきか野心を見出すべきか?』——だが、どうしてこれをしやう、誰がこれを與へ、これをするのが出來やう? 誰が聽かうとするか、誰が聽かせやうとするのか? 最後に、誰が土耳其を支配してゐるのか、如何なる黨派であるか、如何なる勢力であるか? 常に他の土耳其人よりも教養のある土耳其人のゐる君斯坦丁堡には、眞に自分の心からの所信に依つて基督教のライア(土耳其に於ける無権利の基督教徒。マケドニアの迫害せられ居るスラヴ民族)を、實際にこの「自治」なるものから何等かの効果が現れる程に、自分と同様な者と認め切る土耳其が一人でもあるだらうか? 私は「一人でも」と言ふ……若しさうなら、若し一人でもないなら、どうしてさういふ國民と交渉や條約を交すことが出來やうか?——『監督を設けて野心を見つけるさ。』——と、案内者は反駁する。そんなら野心を見つけて御覽! 目下の場合、萬人がこれを解決するやうに煮きつけられるに違ひないから、それが爲にこれを

解決することはどうしても出來ないやうな性質を具へてゐる問題がある。結ばれたる鎖は指では解けなかつた。然るに衆人はこれを指で解からうと頭を碎いてゐた。所へ亞歴山大王が來て、これを刀で兩斷し、以て謎を解決したのである。

けれど尙、例へば、或る新聞の意見がある、或る新聞に限つたことではないが——あの舊い外交的意見がある、又多くの學者、教授、論客、記者、小説家、西歐主義者、スラヴ主義者などの意見があるが、それに依れば、君斯坦丁堡は何れにも屬さないやうになる、これは國際的の、つまり、「共同の場所」ともいふべき、自由市の類となるであらうといふのである。又歐羅巴の均衡はこれを保持するであらうなどいふのである。要するに、直截な、簡單な、明瞭な、唯一の可能な決定を取らずに、複雑な、不自然な學者の論據家が現れて來た譯である。けれど、歐羅巴の均衡とは何ぞやといふ議論が起る。この均衡は、從來、最も強大な歐羅巴の諸國——例へば、五箇國の間の均衡であると豫想されてゐた(即ち、謂はゞ、デリカッシイから、それ等の國が均衡だと豫想されてゐたのである)そこで、五ツの狼が周りに腰を据ゑて、その眞中に甘い肉塊(君斯坦丁堡)がある、そして五匹は、互ひに獲物に取られまいと警戒するやうなことを許りをする。而も、これが問題の解決に最も良い名案だと謂はれてゐる。併し、それが何事かをでも解決するであらうか? 解決するのは朦朧な無稽に、嘗て實現されたことのない、空想的な假設に、否不自然な假設である均衡に基いてゐること丈けである。實際に、嘗て何時か、此世に政治上の均衡なるものが存在したことがあるだらうか? 絶對にない! これは狡い人々が單純な者を欺す爲めに創り上げた狡い定義に過ぎない。露西亞は單純な者でないとしても、正直な人間である。従つて均衡なるものゝ眞理と法則との破

るべからざることを信じたことがどの國より多い。そして、誠實に自ら幾度もこれを履行し、防禦者としてこれに仕へた。この意味に於て歐羅巴は赤裸々に露西亞を利用してゐたのである。而も、他の均衡國は孰れも、或る時までには形式丈けを履行したとはいへ、眞面目にこの均衡の法則に就て考へたことはなかつたやうである——眞個に或る時までには過ぎない、自分の算當から推して甘く行つたと思ふと、何事をも配慮せずに、この均衡を破つたのである。最も滑稽なことは、この均衡が手から抜けたかと思ふと、いつも直ぐに復「均衡」かやつて來ることである。露西亞にも——何事かを破つてはいけぬが、些しは自分の利益をも考へなくてはならないことが生じた時、諸他の均衡國は忽ちに一團となり、『お前は均衡を破る』と、いつて露西亞に押掛けて來た。これと同様のことが國際的の斯坦丁堡に就ても起らうとしてゐる。五ツの狼が互に牙を露き出し、各自がどうしたら隣邦と結託が出来るか、どうしたら他の狼を退治して、少しも多分の利があるやうに肉塊を分け取ることが出来るかといふ機會を窺ひながら、横はらうとしてゐるのである。果してこれが解決であらうか？さうしてゐるうちに、狼の間には狼なりの新しい條件が生ずる。急に五匹のうちのどれかが、最も灰色のが或る日、或る時、狼から小さな狎ころに、既に吠えもしないやうな狎ころに變る。すると均衡に動搖が起る！それのみか、歐羅巴の將來には、五ツの均衡力からたつた二ツの力が成立するやうなことが起るかも知れない、そのときはどこにあなたがたの論據があるか？哲人諸君！序でに、私は敢て一つの理を述べさせて貰ふ、『此の先、君斯坦丁堡が誰かのでないやうな、即ち誰に屬してゐないやうな瞬間と政治状態とが歐羅巴に現れるやうなことは決してない。』といふ公理である。そして私にはさうでない場合はあり得ないやうに思はれる。幾らか眞面目を缺く嫌ひがあるかも知れませ

んが、最後の結着といふ段になると、君斯坦丁堡は英吉利人が唐如に掠略して仕舞ふだらう、嘗て彼等がジブラルタルやマルタを取つたやうにと見るのが正しい見方であると思ふ。即ち列國が依然として均衡のことを考へてゐるその時に、母親が庇ふやうに土耳其の不可侵權を警戒し、土耳其に偉大な將來の文明との可能を豫言し、その生氣ある魂を信じてゐる英吉利人が、その英吉利人が事態が國際に達したと見て取るが最後、回教君主と君斯坦丁堡を啗つて仕舞ふだらう。これは彼等の性質にあり、彼等の方針にあるもので、彼等が常住の無遠慮な無厭けと、彼等の暴力と、彼等の兇惡とに似つかはしいものである！ジブラルタルに於けるが如く、君斯坦丁堡に勢力を保ら得るか、それは他の問題である。今までのことは、勿論申談に過ぎない、私は申談のやうに語つてゐるのである。だが併し、この申談は憶えて置いても悪くないだらう……恐ろしく眞實に似てゐるから……

三 野心に野心

(野心と譯したが、實は色々の條件を綜合して自分に都合のいい、論據を作ると云ふことである。適譯なければ野心として置く。)

斯くて、東方問題の解決には、最も明瞭な、最も健全な、最も單純にして自然な野心の外に凡ての野心が許される。かうもいふことが出来る、豫想される解決が不自然ならば不自然な程、それ丈け早く一般の輿論がそれに共鳴する。例へば茲にもう一つの「不自然さ」がある、『若しも露西亞が歐羅巴の全體に向つて自分の無愁を聲出して説明したならば、萬事は即座に解決され、直ちに片ついて仕舞ふだらう。』と想

儻されてゐる。併かし、これを信する者はお目出たい。ほんとに、若しも露西亞が自分の無慾を、單に表明する許りでなく、*de facto*(*拉典語*、實際に)證明しやうものなら、それこそ、歐羅巴は更に烈しく騒ぎ立てるだらう。一體何だ、我々は何にも取りはしない、何にも得る所なく、只々歐羅巴に我々の無慾なことを證明する許りで、「功德を施し」て、後へ戻るのだ。それを何だらう？ さうだ、歐羅巴にはそれが悪いのだ。『お前が無慾を以て彼等に功德を施し、彼等の獨立を侵害しないことを彼等に示すことが多ければ多い程、彼等はお前を信頼し、お前に心服する所が多くなるのだ。太陽として、至上として、*Dei*(天頂)として、帝國としてお前を尊敵するやうになるのだ。どうして彼等はお前の臣民でなくて、自立した者になり得よう、心の中では自分をお前の臣民と認めるに違ひない、無意識に、不知不識に認めるやうになるに違ひない。』即ちこの、スラヴ民族が精神的に露西亞と膠着することの避くべからざる事が、晩かれ早かれやつて来べきこの、謂はゞ、自然さが、歐羅巴に取つて恐ろしい、この事實が法律に叶つてゐることが歐羅巴の惡夢を成し、將來虞れを造つてゐるのである。彼等から見れば力と野心許りで、我國から見れば自然の法則であり、自然さであり、血縁であり、眞實である。従つて、何れにスラヴ諸國の將來があるべきだらうか？

然るに、歐羅巴は全く反對の主義に基いた、恐らくは、將來をも有するに至るかも知れない程に蓋然性のある野心のみがあるのである。この新しい野心も英吉利製なのである。これは、謂はゞ、*Tory*(千八百三十二年王權を擁護し選舉權擴張法案に反對して保守黨となれる英國の王黨員)派の過誤と失策との修正である。この修正は英吉利自身で速かにスラヴ民族の功德を施さなければならぬといふことに基いてゐる。

るが、スラヴ民族のうちから永久に露西亞の敵を造る爲である。最後に、土耳其と縁を絶ち、弔はれた人々として、又何の働きもない人々として土耳其人を滅ぼし、巴爾幹半島の基督教國民から君斯坦丁堡に中心を置く同盟を組織するといふらしい。報恩の念に厚い、解放されたスラヴ民族は自分の救済者として、又解放者として英吉利に手を伸べるやうになる。そこで英吉利は『彼等の眼を露西亞に見開かせる。』そして『それら、お前たちの兇惡な敵だ。露西亞はお前たちの事を心配してゐるやうな風をして、どうしてお前たちを呑んでやらうか、どうしてお前たちからお前たちの必ず来るべき、光輝ある政治的の將來を奪はうかと睨りながら見てゐるのだ。』斯うして、スラヴ民族が露西亞の誦許を信すると、露西亞に對して、直ぐに新しい、巖丈な城砦を造り、『これで露西亞には君斯坦丁堡が見えなくなり、彼等はそこへ露西亞を入れるやうなことがなくなる。』

これより狡いことは、又これよりの中してゐることは、鳥渡考へることが出来ない。肝心なところは極く單純で、儲かに存在してゐる事實に基いてゐるのである。この事實に就ては、私も前に一寸言つて置いた。その要旨はスラヴの知識階級の一部には、スラヴ民族の代表者や指導者の或る者には露西亞の目的に對して隠れた不信、従つて、露西亞と露西亞人とに對する敵意が實際に存在してゐるといふことである。スラヴ民族、殊に塞耳維人や黒山人に取つて——露西亞は依然として太陽であり、依然として望みの綱であり、依然として親友であり、母であり、庇護者であり、將來の解放者である！けれど、スラヴの知識階級は、事が別である。無論、私は全體の知識階級に就て言ふのではない、私は皆に就て言ふやうな勇氣はないし、又自分にも許さない。『けれど、決して皆ではないが、併しその大臣級の人々には、(八月號の日記

にもかういふ風に言つて置いたと思ふ。露西亞は狡猾である、どうして彼等を攻取らうか、呑んで仕舞はうかと眠りながら見てゐると、ばつかりしか思へばないやうな人々があるだらう。『我々露西亞人を非常に多くの教養あるスラヴ人が好まないことは少しも隠しはしない。例へば、彼等は自分たちと較べて我々を教養のない、殆ど野蠻人かの如くに看做してゐる。彼等は我々の社會生活に於ける進歩、我が内部の組織、我が改革、我が文學に興味を感ずることが極めて薄い。彼等のうちでも非常に學問のある者丈けがプウシキンのことを知つてゐるのみである、けれど、知つてゐる者の中にも彼を偉大なるスラヴの天才だと認めやうとする者はそんなに多くはあるまい。教育のあるチエツク人の多くは、プウシキンのやうな詩人は彼等の中に四十人もある位に思つてゐる。尙、是等のスラヴの分系は何れも、彼等が現在にある通り、まだ經驗のない、人生を知らない國民の如く、政治的に自尊心が強く、極めて怒りつほい、かういふ國民の間には、英吉利の野心は、それが動き始めれば、成功を納めるであらう。そして若しも、英吉利に於て進歩黨が捷つて、その番が来れば、何故に英吉利が動き出さないのだらうか、想像に困難である。然るに、英吉利には如何に多くの技巧と不自然さと苛酷と虚偽があるだらう！』

第一に、あのやうに似寄らない巴爾幹半島の諸民族をどうして結合することが出来やう、而も君斯坦丁堡を中心としてなぞ？此處には希臘人がゐる、スラヴ人がゐる、羅馬人がある。誰の君斯坦丁堡になるのだ？共同である。さすれば、そこに分離と紛議が起る、縱令希臘人にはスラヴ人とは初めてではあるが。(若しスラヴ民族が悉く一致することを提議すれば)。その時は頭を置いて、帝國を建設するまでだと云ふだらう——計畫の空想にはかやうに豫想されてゐるやうに思はれる。けれど、誰が帝王となるのか——

スラヴ人か、希臘人が、もうハプスブルグ家からでもあるまい。兎に角、直ぐに二元論と分裂が現れる。要するに、希臘要素とスラヴ要素とは結合することが出来ない。此の二要素は各々自分に特有な、名譽ある政治の將來に就て尨大な、共に測ることの出来ない、詐つた空想を持つてゐる。否、英吉利は、一度土耳其人を残して置かうと欲したならば、凡てをもつと組織するであらう。茲に於て、私が上に申談だと言つた目論見が生ずるであらう、即ち英吉利は自分が、『スラヴ民族の幸福の爲に。』と、言つて君斯坦丁堡を呑んで仕舞ふであらう。『俺は、スラヴ人たちよ、お前たちから北方の巨人に對して、君を君斯坦丁堡へ入れないやうに、同盟と城些とを北方に造るのだ。一度彼が君斯坦丁堡を取るとなると、お前たちを残らず捉へて仕舞ふから。さうなれば、お前たちには名譽ある政治の將來などは毫しもなくなくなつて仕舞ふ。お前たちは心配するな、希臘人よ、君斯坦丁堡はお前たちのものだ、俺は君斯坦丁堡がお前たちのものであるやうにしたいからこそ、それを占領するのだ。おれはそれを露西亞に渡したくないばつかりなのだ。スラヴ人は北から護る、俺は海から——さうなれば誰をも入れはしない。俺はお前たちが堅固になり、お前たちから鞏固な、成熟した同盟の帝國が出来上るまで、ほんの一時、俺はお前たちの指導者として防御になるのだ。俺が立つてゐたことのない所は尠くない、俺にはジブラルタルもあれば、マルタもある。俺はイオニテ群島を返したではないか。』……

要するに、若しこの進歩黨の製品が使用される段になると、繰返して言ふが、その成功は疑ひ難い、けれど、勿論、ほんの一時である。否、その期間は數年に亘ることが出来るかも知れない、けれど、それは、自然の限度が来る時は、心ずや碎けて仕舞ふに違ひない。その時はもう、この目論見なるものが毀譽と不

自然とに基いてゐるに過ぎないから、いざ碎けるとなると根こそぎに碎けて仕舞ふであらう。

虚偽は露西亞が中傷された所に存する。如何なる霧も眞實の光線に堪え得るものでない。スラヴの諸國民と雖も、何時かは露西亞の無慾なる眞實を諒解するだらう。又その時までには彼等と我々との精神的團結も充實するだらう。我々と彼等と動作の一致が始つたのは極めて最近のことである、けれど今は——今は決して止まることなく、益々強くなつて行く許りである。スラヴ人は、若しもあらゆる中傷が成立するやうなことがあらうとも、遂には、露西亞の彼等に對する親身の愛を信するだらう。偉大にして力ある露西亞の魂が、彼等に血縁の根元として、彼等に斥くべからざる影響を及ぼすであらう。彼等は、凡てのスラヴが全體とならなければ、細かな割據や、争議や、嫉妬の中で精神的の發達が出来るものでないことを想つてゐる。露西亞の團結が尨大で有力なことは、もう、彼等を騒がせ、彼等を駭かさなくなつて、却つて、彼等を中心に、又根元に牽き着けて仕舞ふであらう。宗教の同一なことも有力な連鎖となるだらう。露西亞の宗教、露西亞の正教は露西亞國民のみが自分たちの神聖なものと考へてゐるもの一切である。これに彼等の理想と眞實と生活の眞理とが盡きてゐる。然らば、スラヴの諸民族は——四世紀に互る回教の壓迫に惱まされてゐた時、その宗教にあらずして、何を以て一致を續け、何を以て生きて来たか？彼等はこれが爲には異常な苦患を嘗めて来たのであるから、その一事でもこの宗教は彼等に取つて貴い筈である。最後に、スラヴ人の爲には、既に露西亞の血が流された。血は決して忘れられるものではない。狡い人々はこれを眺めてゐた。スラヴ人に露西亞を中傷することが出来るので、スラヴ人は成功と成功の確實なことに對する信仰とで勇氣がついた。けれど、かやうな成功は永久なものではない。繰返して言ふ、それも

一時は實現されるかも知れない。若しも進歩黨が勝を制すれば、この目論見は斷乎として行はれるであらう。これは考に入れて置かなければなるまい。最後の期限が来れば、英吉利人は「俺たちが功德を施すことが能きる。」ことを露西亞に警告する爲に、造作もなくこの目論見に取掛るであらう。

序でに、流された血に就て一言する。若しも我が義勇兵が露西亞が、宣戦しなくとも、遂に土耳其を粉砕して、スラヴ人が解放したらばどうだらう？聞く所に據れば、露西亞から来る義勇兵や、間斷なく集まつて来る恤兵金は大變なもので、この分で續けば、仕舞ひには、チエルニャフの下には立派な露西亞人の軍隊が出来上るであらう。兎も角、歐羅巴と歐羅巴の外交家はその結果に驚愕するであらう。「若しも義勇兵のみでも土耳其を制服した上に、露西亞が舉つて出陣するとなつたらどうだらう？」歐羅巴にはかういふ判斷が湧かないでは濟むまい。

露西亞の義勇兵に祝福あれ、だが聞けば露西亞の士官は何十人と枕を並べては戦死するさうである。可憐な士官たちよ！尙一つ小さな叱言を言ふのも無駄ではないと思ふ、私の考へでは、可なり痛切なことである。露西亞の新聞には、露西亞の義勇兵が塞耳雜に入込んで、幾多の華々しい戦死を遂げるに従つて「巴爾幹のスラヴ民族を解放する爲に土耳其人と戦ひに倒れた露西亞人の家族の爲に。」と、いふ新しい寄附欄が設けられてゐる——そして寄附は集まり始めた。「ゴロス」新聞ではこの欄で、もう、三千留も集まつた、もつと多く寄附するやうになれば、勿論、それに越したことはない。只、この、寄附の定義がほんとに完全してゐないこと丈けが少しく不可ないと思ふ。慰問金は戦争で倒れた露西亞人家族にのみ集められてゐる。だが不具となつた者の家族には？果して是等には何にも給しないのか？かういふ家族は、倒

れた者の家族よりも、恐らく、困難ではなからうか？倒れた者は、もう、倒れたのである、そしてその跡を弔つてゐる、だがこれは不具者として戻つて来た。足もなく手もなく、或は非常な負傷を受けたが爲に、彼の健康はその時から人一倍の看護と治療とを不斷に要するかも知れない。尙且、縦令不具者と雖も、食ひもすれば飲みもする、従つて、貧しい家は餘計な口が殖えた譯である。尙、この欄にはもう一つの、非常に間違つた不明の點があると思ふ、即ち『倒れた露西亞人の家族の爲に』云々とある。併し、家族には充分な、或は少しの不足しないのとまるで貧しい、非常に不足してゐるのとあるではないか。若しも皆に分配するとすれば、貧しい者には少しも残らない。だから、この欄は次のやうにでも造り換へたらよからうかと思はれる。即ち『巴爾幹のスラヴ民族を解放する爲に土耳其人の戦ひに倒れ、若しくは不具者となつた、不足してゐる露西亞人の爲に。』と。但し、私は單に考へだけを述べたまでである、それで、若し誰かゞもつと精確に定義を作ることが出来れば、勿論、尙更しい。只望むらくは、この寄附欄が出来ただけ速く、出来るだけ豊富に充たされることである。この欄は非常に有益で、全く缺くべからざるものである、そして露西亞の意志に殉じて戦つてゐる、我が俠氣ある義勇兵に大きな、道德上の影響を與へるであらう。

四 着物(東洋人の着る衣類)と石鹼

東方問題に關する考察の間に、私は一つの不思議な議論に遭遇した。先頃、外國の新聞に異様な事が現

れた。それは、殆ど空想に近い、熱した觀念を以て、若しも土耳其人を廢滅して、これを亞細亞に追ひ返したとすれば、世界中はどうなるだらうと想像するに至つたのである。即ち不幸が起り、恐しい動搖が生ずるだらうといふ事になつて来たのである。或は亞細亞にか、亞拉比亞にかのどつかに新しい回教國が現れ、再び狂信が蘇り、回教の世界が歐羅巴に肉薄するであらうと言ふ者さへもあつた。もつと深い思想家は凡ての國民を取つて、亞細亞に移出するなんてことは出来ない相談であるといふ意見に止まつた。私はかういふ議論を讀んだ時、何故か不思議な氣がした、そしてすうつと何のことも推量が出来なかつた。ところが、是等夢想家の外交家は實は問題を文字通りの意味で考へてゐるのだといふことが解つた、即ち問題は政治的に土耳其帝國を滅ぼし、凡ての土耳其人を實際に、文字通りに、具體的に取つて亞細亞のどつかへ移さうとすることに就て進んでゐるのかの如くに見えたのである。どうしてこんな見解が現れたのか——一向に解らない、少くとも、宴會や會合で、恐ろしい動搖や不幸があるかの如くに言ひ觸らして民衆を嚇かしたに違ひない。然し、殆ど何事も起るべき筈もなからうし、又一人の土耳其人も亞細亞に移るやうな事にはなるまいと思はれる。露西亞では既にこれに似たやうな事件が起つたことがあつた。韃靼の酋長政治が終ると、俄かにカザン王國が勢力を得て、一時は露西亞の全土は基督教徒と回教徒と何れのものになるか豫想がつかない程であつた。この王國は當時の東露西亞に君臨し、アストハンと關係を結び、ウオルガを掌握し、又露西亞の横合から、これが豪勢な同盟國として恐ろしい賊徒であるクリミア酋長國の韃靼王が名告り出て、その勢力は莫斯科にまで及んだ。由々しき大事であつたので、また暴帝にはならなかつた、若い皇帝のイワン・ワツリエウイチは當時の東方問題を片づける爲にカザンを取ることに決心した。

恐ろしい包圍攻撃があつた——その後カラムジンはこれを非常に雄辯に描寫してゐる。カザン人は死を怖れず、華々しく頑強に墨守した。然し、押し寄せた軍勢は間道を破壊し、突撃してカザンを陥れた。所が、カザンに言つた。イワン・ワシリエウイチ皇帝はどういふ處置を取つたか？その後ノウゴロツドでやつたやうに、行く光の邪魔にならないやうに、カザンの住民を一人一人に殺して仕舞つたらうか？彼等を曠野のどこかに、或は亞細亞に移したであらうか？そんなことは毫もしなかつた、一人の鞣紐人をも移さなかつた。凡てが舊の儘に残つた。前にはさしもに危険な、勇敢なカザン人は永久に鎮まつた。それは最も簡単に、思つた通りに行はれたのである、市を占領すると直ぐに聖母の聖像を昇き入れ、カザンの都が奠められて初めての大供養が営まれたのである。それから正教の寺院を定め、住民から武器を取上げて露西亞の政府を置き、カザンの都は然るべき所に移した——かういふ事が一日の中に行はれたのである。暫く経つて、カザン人も我々に着物を賣るやうになり、尙暫くの後には、石鹼をも賣り始めた。(私はかういふ順序に、即ち始めは着物を、それから石鹼をといふ工合に行はれたのだと思ふ。)それで事は終りを告げた。これと同じやうに、この回教國を政治的に滅ぼさうといふ善良な考へが起つたならば、土耳其でも、このやうに事は終りを告げるであらう。

第一に、聖ソフィヤで大供養が行はれ、それから大主教は新たにソフィヤを明るくし、莫斯科からの鐘はその日に間に合ふだらうし、又土耳其皇帝は然るべき所に遷し、それで萬事が落着するだらう。成る程、土耳其人には一つの掟があるが、それはコオランの教理であつて、回教徒だけは武器を佩びることが出来、又佩びなければならぬのだが、ライア(土耳其の基督教徒)はさうでない。近頃になつて、ライアにも

武器を持つことを許すやうになつたが、それには澤山の税を納めなければならぬ。これは國家の新しい收入を考へ出した譯であるから、従つて武器を佩びてゐる者は極めて鮮いやうになつてゐる。されば、このたつた一つの掟を最初の日、即ち聖ソフィヤに於ける最初の供給の日に、ライアだけは武器を佩びることが出来、又佩びなければならぬが、回教徒はどんなことをしても、或は税を納めても出来ないといふ意味に變更することが出来るであらう。以上が安寧の保障である、そしてほかには何にも要らない譯である。暫く経つと、土耳其人は直ぐに着物を賣り始める、それから石鹼を、而もカザンのよりも好い石鹼を我々に賣るやうになるだらう。農業に就て、殊に煙草や葡萄の製造に就ても、新しい制度と新しい法律が行はれるに於て、非常な速度と非常な成績を以て振興し、勿論、少し宛ではあるが、過去の土耳其帝國が歐羅巴に拂はなかつた負債をも、仕舞ひには、返済するやうになるだらう。要するに、最も好い、最も適當なことよりほかには何にも起らないであらう、無論、些しの動搖もなく、一人の土耳其人も歐羅巴から移出するやうなことはないであらう。

東洋にも何にも起るまい。回教國はどこか、亞細亞の曠野が砂漠に名告りを擧げるだらうが、歐羅巴を襲ふには、我々の時代に於ては、莫大なる金子、莫大なる新式の武器、政府から裝弾した莫大なる鐵砲、莫大なる糧車、莫大なる工場が要るから、回教の狂信のみではなく、英吉利の狂信を以てするも、新らしい回教國を助けることは能きないであらう。要するに、好いことよりほかには何にも起りつこない譯である。だから、早くこの好いことが行はれて欲しいものである、さもないと、悪いことは數へ切れない程あるから。

二 章

一 陳腐な人々

「一切の高尙な思想は、一切の正しい、凡ての人たちを結びつける感情は、民族の生活に於て最大の幸福である。この幸福が我々を訪れたのである。我々は我々の増大した一致、過去に於ける幾多の不可解の解明、益々強くなつた我國の自覺を感ぜずにはゐられなくなつた。」

私は八月號の「日記」の結末の論文でかういふことを述べて置いたが、誤つてゐなかつたと信ずる。國民の生活に於て正しい、人々を結びつける感情は、眞個に幸福である。若しも私が謬つてゐたとすれば、それは、恐らく、私が「我々の増大した一致と自覺」の程度を誇張した嫌があることに過ぎない。けれど、それにも私は譲る氣はしない。露西亞を愛する者は上流の露西亞人と下層の民衆……民衆の生活との分裂に心を痛めてゐない者はない。この分裂は實際に存在する事實として、今では何人も疑を容れない所である。この分裂なるものがスラヴ問題に關する今年の全露西亞運動と共に幾分か薄らいで來たやうに思はれる。勿論、我々と民衆との分裂が既に完く落着し、恢復したやうに思ふのは誤りである。これは繼續してゐるし、又この先も永く繼續するであらう。けれど、今年になつてから我々が經驗してゐるやうな時局は一増加した一致と不可解の解明」とに貢獻することは疑ひがない。要するに、一方からは我々が民衆と露

西亞の生命とを理解する力を助け、他方からは民衆そのものが彼等に取つては異國人であつて、露西亞人ではないやうな、彼等の所謂「旦那がた」である異様な人々との親近を促すことは疑ひの餘地がないと思ふ。民衆が目下に於ても、今年の全露西亞運動に於ても、吾が知識階級の多くの者よりも遙かに健全な、確實な、明瞭な方面から自己を發揮したことを認めなければならぬ。民衆には卒直な、強烈な、確固な觀念が驚くべき共通性と一致とを以て發現された。民衆には『何が爲にスラヴ民族を助くべきか？助ければならぬか？何人を餘計に助くべきか、又何人は助けなくてもよいか、我々は何等かの機會で我々の道徳性を傷けるやうなことはないか？又餘りに助け過ぎて我々の社會の發達を害するやうなことはないか？最後に、我々は何人と戦ふのだ、又戦ふ要があるか？』などといふ議論さへも起らなかつた。然るに、我が知識階級を訪れた不可解は數限りもなかつたのである。殊に上流の知識階級、分けても今だに歐羅巴教育（時にはまるで架空的な）の高見から民衆を見下してゐる上流の「部分」には可なりに酷い調子外れや、見方の軟弱や、最も簡単な事柄の無理解や、何をすべきか、又何をすべからざるかに就て殆ど笑止な程のぐらつきが曝露された。『スラヴ民族を助けたものであらうか、助けないものであらうか？助けたものとしたら、何の爲に助けたものであらうか、何の爲に助けたのが道徳的であり、又美しくあるだらうか？あれが爲だらうか、これが爲だらうか？』時には異様の感を起させる様な、かうした事が實際に現れて、會話にも聞かれれば、事實にも見られ、文學にまで反映したのである。けれど、この種の論文で本年九月號「歐羅巴時報」の「國內評論部」にある論文よりも驚くべきものを讀んだことがない。論文は虐けられてゐるスラヴ民族に對する兄弟としての助けに就て、現在の露西亞運動を論じてゐるが、これに出来る丈け深慮の

ある見解を投げやうと氣を配つてゐる。論文の中で露西亞の民衆と社會とに關する箇所は多くない——四頁か五頁である。それ故に私は、無論、凡てを拔萃する譯ではないが、その數頁を順々に檢べることにする。その數頁は非常に興味を喚ぶものであつて、謂はゞ、一種の記録を構成するものだと思ふ。私の目的は私の企てた仕事の終りで自然に決まるから、特別の教訓を提出すには及ぶまいと思ふ。

但し、最も短かい序辭として述べて置くが、論文の筆者は二十五年前の我が社會では我が知識階級の頂上を構成してゐたが、今では極めて舊くなつて、純粹な、最初の儘の姿では極めて罕に見る所の陳腐な理論的西歐主義者に屬することは明白である。これは民衆と生活とから離れた理論的歐化主義の遺物であつて、嘗ては存在の理由を具へてゐたが、それに特有の利益を除いては、未だに害毒を續けてゐる。最も有害な、多くの偏見を遺したものである。かういふ人たちの歴史上から見た利益は消極的なもので、彼等の論斷や宣告(彼等は終局のものとして宣告しないではゐられない程に傲慢であつた)極端なことで、彼等が激越な理論を以て達する最後の柱石にあつた。この極端が不知不識理智の覺醒と民衆への轉換と、民衆と結合への轉換とを助けたのである。今や、二十五年を経て、露西亞生活の實地研究を以て得た、嘗ては聞いたことのない、幾多の新しい事實を経た今日にあつては、この陳腐な理論の「遺物」はどんなに威容を整へた所で、滑稽な様子を隠すことは出来ない。最も可笑しな點は、彼等が、彼等の心意では、眞の露西亞生活が進まなければならぬ道の指示の唯一の若々しい保管者であり指導者であると自任してゐることである。併し、彼等はこの生活からは遙かに遅れて仕舞つて、それを何にも知つてゐなくなつた程である。従つて、まるで空想的な世界に住んでゐる譯である。さればこそ、社會の昂奮が強烈な時などに、

この理論的歐羅巴主義が如何なる程度まで民衆や社會と分離したか、又その見方や決定が社會生活の異常な時にも依然として、如何なる程度まで傲慢であるか、而も實は如何なる程度まで、民衆の感情と理性との明白な、單純な、確固な、搖ぎのない斷決に較べて、薄弱であり、暗愚であり、誤つて居り、ぐらぐらしてゐるかを檢べるのは非常に興味あることである。けれど、もう、論文を見ることにしやう。

但し、筆者がスラヴ民族の爲の社會運動を認め、これを充分に誠意あるものと認めてゐること、いな、認めることに異議を挟まないことは恕すべきことである。勿論、これを認めない譯には行くまいが、併し、これは、この筆者のやうに陳腐な「歐羅巴人」には鮮ならざる手柄である。それにも拘らず、彼は何かしらんに不満である。何故かこの運動の始まつたことが氣に入らないのである。成る程、彼は運動の始まつたのが不満だとは眞つ直ぐに表明してゐないが、何かを呟いて、あらを探してゐる。我が理論的西歐主義の最も純粹な、最初の代表者の一人であるグラノフスキイも、その當時、東方問題や、幾らか現在のに類似してゐる、五十四年から五十六年に亘る戰爭の時の民衆運動に就て書いてゐるが(八月號グラノフスキイに關する論文参照)そのグラノフスキイも、今の我が民衆運動に不満であり、又我が民衆を見るに、現在の歐羅巴時代には適しない、或は原始的とも見ゆるまでに發達しない形式を以て自分を發揮するものよりも、依然として動きのない愚圖々々な集團として眺めたに違ひないと私は思ふ。概して、是等の舊い理論家は、民衆を愛したには愛したが、(但し、それは餘り我々に知れてゐないことであるが、)その實は毫しも愛しなかつたやうに見える程に、只々理論に於てのみ、即ち自分たちがさういふ風に見たいと欲する形式や觀念に於て愛してゐたのである。但し、彼等の辯護には、彼等は未だ嘗て民衆を知らなかつたこと、

又民衆を知る必要も、民衆と知合ふ必要も見つかなかつたことを認めなければならぬ。彼等は事實を醜くしたのではない、單にそれを理解しなかつたのである。それ故に民衆の魂や意義、深く清純な感情の幾層倍も清純な黄金は彼等によつて醜惡と無智と露西亞民衆の鈍い無思慮とに歸するものとされて仕舞つたのである。若しも民衆が毫しでも彼等の氣に入つた様子をしないで(多くは佛蘭西巴里の愚民の眞似だが)彼等の前に立現れやうものなら、恐らく、少しでも構ひつけないであらう、『先づ第一にこの戦争は神聖であるといふ思想を除かなければならぬ。』と、グラノフスキイは東方問題に關する著書の中で叫んでゐる。——『今や十字軍に對しては何人をも起たしむることは出来ない、今日はさういふ時代ではない、何人も主の棺の解放に動く者はない。』云々と。「歐羅巴時報」の理論家も、その通りである。彼にも新聞の論調が氣に入らないのである、彼はそのあらを探してゐる。彼には我が民衆と社會とが彼の欲するやうな論據に依らずに寄附をしてゐることが氣に入らないのである。彼はもつと現代に適合した、もつと開けた見方を欲してゐるのである。だが我々は復しても横途へ外れて仕舞つた。

スラヴ民族の爲の露西亞運動に關する論文のその箇所の——始めは抜かすことにする——始めは非常に特質があるのだが、我々は一行一行に止まつてゐることは出来ない。筆者は次のやうに言つてゐる。

II Knjgo--Mokiew, nha

『併し、これに就て我が新聞に現れた幾多の議論中には調子の外れた、異様なものがあつたことは否む

譯に行かない、殊更に自分の個性を示さうとする希望が見え透いてゐたものなどはそんなに大したことではないから言はないが、大露西亞人でない露西亞人民の感情の一部に依る探偵が曝露してゐるものは指摘せずにはゐられぬ。この悪い習癖は遺憾ながら、未だに我々を離れない。然るに、説かれたる事の實質から推して、一般の露西亞民族にはいつてゐる諸民族に關しては特別の慎重を要したのである。一般にスラヴ民族の爲の運動には「我々の同宗徒」なることを不斷に論じて、餘りに宗教的な性質を加へてはならぬことを認める。露西亞の社會にスラヴ援助を鼓吹するには凡ての露西亞人を結びつける動機があれば充分で彼等を分離させるやうな動機は餘分である。若し我國が我々のスラヴ民族に對する同情を自らに説明するに、主として、彼等が我々の同宗徒であることを以てする時は、我が回教徒の中で土耳其軍に走らうとする希望を申出で、或は土耳其の爲に寄附金を募集しやうとするやうな者に對しては如何なる態度を取るべきであるか……高架索の或る地方に起つた不穩は正教を奉ずる大露西亞人は家に住んでゐること、彼は露西亞の長男ではあるが、一人息子ではないことを我々に語るものである。』

現代に於て、或る種の舊い「指導者」が抱懐する陳腐な理論的歐羅巴主義が如何に社會の眞義と乖離してゐるか、又如何に暢氣な「Knjgo--mok, chw, nha (當時の流行語か、譯者知らず)」まで言ひ及ぶかを示すにはこの一事で充分であらう。筆者は虚構と作り事と、最も空想的な理論と無鐵砲なことゝに驚かざるを得ないやうな問題に苦しみつゝ、それを我々に課してゐるのである。『我々が同宗であるが爲に犠牲の擧に出づるとすれば、我が回教徒の中で土耳其軍に走らうとする希望を申出で、或は土耳其の爲に寄附金を募集しやうとするやうな者に對しては如何なる態度を取るべきか?』つて言ふのだ。然らば、そこに何等かの

問題があり得るだらうか？その答へに何等かの動搖があり得るだらうか？正しい心を持った普通の露西亞人ならば誰でもあなたに最も正確な答を與へるだらう。露西亞人許りではない、何れの歐羅巴人も、何れの北亞米利加人も、これに對しては最も明瞭な策を與へるだらう。只歐羅巴は答よりも先に極度の驚きを以つて貴下を眺めるだらう。序でだから言ふが、露西亞の西歐主義即ち歐化主義は、露西亞の地上に力を固むるに及んで、段々に、極めて屢々、遙かに歐羅巴らしくない蔭影を取つてゐる。それ故に、或る「指示の保管者」が我々に齎したる或る種の歐羅巴思想は、時として、更に解らないことがある——歐羅巴思想は露西亞流の理論の中で、理論家が更に知らない、又知る必要がないとしてゐる露西亞生活に適用されたるうちに、色々に挽き混ぜられて、それ程に變つて仕舞ふのである。『我が回教徒のうちのそれ等に如何なる態度を取るべきか。』云云といふが、それは頗る簡單である。第一に、既に我々が土耳其と戦争状態に在り、我が鞑靼が金錢を以て土耳其を助け、或は土耳其軍に投ずるとしても、社會が彼等に對する態度を決める前に、政府は彼等を國賊として取扱ふだらう、すれば必ずや適時に彼等を停めることが出来るであらう。第二に、まだ宣戰になるぬ前に、若しも土耳其人が凡ての露西亞人が等しく同情してゐるスラヴ人に手を下すやうなことがあれば、土耳其人の爲に露西亞の回教徒が金や人間の寄附を始めるやうな場合、果してあなたは露西亞人の誰かが斯様な事實に對して屈辱と憤怒とを感ぜずにはゐられると思ふか。あなたの考へでは一切の禍は寄附の性質が宗教的なことにあるのだ。即ち、既に露西亞人が同宗者としてスラヴ人を助けることになつたとすれば、露西亞人は、公民たる平等權と正義とを破らすに、どうして露西亞の鞑靼人の、その同宗者たる土耳其人の爲の寄附を禁ずることが出来るかといふにあるが、それは反對であ

る、これに就ては完全な權利を持つことが出来るのである。何故ならば、露西亞人は土耳其人に對してスラヴ人を助くるとも、鞑靼人の敵となり、戦争を以て鞑靼人に向はうとは考へにも持たないのである。然るに、鞑靼人は、土耳其を助ければ、露西亞と斷交して、露西亞の叛逆者となる譯で、又土耳其軍に投ずれば、戦争を以て眞直ぐに露西亞に向ふことになる。且、露西亞人たる私が、よしんば同宗といふ關係から土耳其人と戰つてゐるスラヴ人に寄附したからとて、土耳其に對するスラヴ人の勝利を望むのは、土耳其人が回教徒であるが故ではなく、單に土耳其人がスラヴ人を斬るからに過ぎない。然るに鞑靼人が土耳其に移れば、それは私が基督教徒で、恰も、回教徒を滅ぼさうとも欲してゐるといふ丈の理由から移るのであるかも知れない。然るに私は毫しも回教徒を滅ぼしたいのではない、只自分の同宗者を護るに過ぎない……スラヴ人を助くるとも、私は鞑靼人の宗教を襲はない許りでなく、私には土耳其人の回教なるものに用はない。土耳其人は、只スラヴ人に手を觸れさへしなければ、幾らでも回教徒たるに差支へない。茲に於て或は言ふだらう、『お前が土耳其人に對して同宗者を助ければ、それが即ち露西亞の鞑靼人とその宗教に反ふことだ。何故ならば、彼等には回教の法典がある、土耳其皇帝は凡ての回教徒の法皇である。ライア(基督教徒)は、既にコオランに依つて、自由たるを得ない、又回教徒と平等たるを得ないのだ。ライアの平等たらんことに援助すれば、露西亞人は回教徒の眼には、土耳其人に向ふのではなく、凡ての回教に向ふのである。』けれど、かうなれば、宗教戦争の發頭人は鞑靼人であつて、私ではない、且、これは全く別種の駁論ではないか、又そこには如何なる奸策も、如何なる口實き効くものではない……あなたは一切の禍は同宗からであつて、若しも私が同宗者としてスラヴ人を助けることを鞑靼人から隠せば、却つ

て、何かほかの口實で、例へば、スラヴ人が土耳其人に迫害を蒙つてゐる、「人間の第一の幸福」たる自由を奪はれてゐるといふやうな口實を藉りてスラヴ人を助けてゐることを見せるやうなもので、韃靼人は私は信するだらうかと思つてゐられる。併し、不驅けな申分ですが、如何なる回教徒の眼にも、如何なる口實を以てするも、ライアを助くるは、私が宗教の爲にライアに赴援する。かくの如くに見えるので全く同じことである。果してあなたはこれを知らなかつたのか？而も、あなたは「露西亞の社會にスラヴ援助を鼓吹するには凡ての露西亞人を結びつけるやうな動機で充分である、彼等を分離さすやうな動機は餘分である。」と、書いてゐられる……これ即ち分離さす動機として同宗のことを書かれたのであり、露西亞の回教徒のことを書かれたのである——そして直ぐその場でそれを解説されてゐる。あなたは「自由の爲の戦争」をスラヴ民族の爲の寄附を募るに最善の、又最上の口實、あなたの言ひ表し方に依れば、「動機」と想つてゐられる。又、「自由の爲のスラヴ民族の戦争」は大いに韃靼人の氣に入つて、彼等を安心させるものだと信じてゐられるやうに見受ける。併し、くだいやうですが、露西亞の回教徒に取つては、土耳其人を助けに赴かうと決するやうな者である以上、凡ての動機は同様である。如何なる口實で戦争が始まつても、彼等の眼には宗教戦争としか映らない。けれど、韃靼人がさう解するのは露西亞人の罪ではない。

三 前篇の續き

こんなに議論を擴げなければならなかつたのは残念なことである。だが、若くも佛蘭西を土耳其とが干

戈を交へるやうなことがあつて、佛蘭西に屬する回教徒やアルジェリアの亞拉比人が騒ぐやうなことがあつたら、果してあなたは、佛蘭西人は、あらゆる精力を盡して直ぐに彼等を鎮めはしなうと思ひますか？そして、回教徒が屈辱を感じ、憤慨するやうなことはあるまいかとの虞れから神妙な態度を探り、最善の立派な「動機」を甘んじて隠すだらうと！あなたは嚴かな調子で、『高架索の或る地方に起つた不隠は（備考、して見れば、不隠のあつたことは、あなた自身が言明してゐられる譯です）正教を奉ずる大露西亞人は、家に住んでゐることと彼は露西亞の長男ではあるが、一人息子ではないことを我々に語るものである。』と、露西亞の爲に教訓を書いてゐられる。これは如何にも嚴かな言葉であらうが、若しも高架索人が眞個に騒ぐやうな場合、大露西亞人は何とするだらう？この家にゐる長男は、それも家にゐる次男である回教徒の高架索人が自分の宗教に就てあのやうに感受し易く、長男が土耳其人に反向ふのを見て、自分と回教全體に反向ふものと取つたからとて、どこに罪があるのだらう？あなたは「家にゐる長男」（露西亞人）が次男（韃靼人や高架索人）の心を辱かしめるやうなことはあるまいかと心配してゐられる。それは如何にもヒウマンな、開けた見解に充ちた心配である！あなたは正教を奉ずる大露西亞人は「露西亞の長男ではあるが、一人息子ではない。」ことを論據としてゐられる。失禮だが、それは何のことですか？露西亞の土地は露西亞人に、露西亞人のみに屬してゐて、露西亞の土地である、そのなかには韃靼の土地は微塵もないのである。露西亞の土地の殘虐者であつた韃靼人は闖入者である。併し、彼等を征服し、彼等から自分の土地を奪還したけれども、露西亞人は韃靼人に二世紀の殘虐に對する復讐をしなかつた、回教土耳其人が前に毫しも自分に迫害を加へなかつたライア（基督教徒）を虐待したやうに、韃靼人を虐待するやうなこと

はなかつた。——反對に、あなたが、恐らく、あなたの眼から見れば爾く開化してゐる西歐の文明國にも見られないやうな、自分と平等な、完全な公民権を與へたのである。否、恐らく、露西亞の回教徒は露西亞人そのものよりも、露西亞の土地の持主であり、主人である者よりも高い權利を享有した程である——韃靼人の信教も嘗てこれを侮辱し、壓迫し、追窮したことはなかつた——西歐のどこだつて、又世界ちうで、眞の露西亞人の心にあるやうな、廣い、ヒウマンな信教上の忍耐を見出すことは出来ないのです。それを、韃靼人は露西亞人から遠ざかることを好む(殊に、自分が回教であるが故に)けれども、露西亞人にはそんな傾きは微塵もないではありませんか。これは韃靼人の傍で暮したことがある者に聞けばよく解ります。それにも拘らず、露西亞の土地の主人は露西亞人があるのみである(大露西亞人、小露西亞人、白露西亞人——それは何れも一つのものである。——永久にさうなつてあるべきである、そして、既に正教の露西亞人に回教の土耳其と戦ふ必要が到来する以上、決して露西亞人は何人にも *no*(拉典語。否定)權なる言を吐くことを許さないのであります。たとひ同宗者としてでも苦しめられてゐるスラヴ人に對する同情の念を——何人にも屈辱とならない、最も寛大な、自然の同情を披瀝することさへも氣兼ねる程に韃靼と優しくし、その上に、如何にもして韃靼人に露西亞人の使命と將來と目的とを構成してゐるものを隠すのは、これ露西亞人に取つて笑止でもあり、又馬鹿にした要求である。私が自分の信教と同宗者と同情したからとて、何で韃靼人を侮辱し、何で韃靼人の信教を追窮することにならう？又彼等の信教から見、我々の土耳其との戦争はどんな戦争でも宗教的性質を探るものであつた所で、それが私の罪であらうか？露西亞人回教なるものに對する根本の見解を變へることは出来ない。あなたは『それなら、優しくし、認

密にして彼等を侮辱しないやうに努めろ。』と、言はれる。けれど、土耳其人がそんなに感じ易いとすれば、回教の寺院と露西亞の教會とが一緒に立つてゐる街の空氣でも、恐らく、癩に觸るだらう——然らば土耳其人の憤慨を避ける爲に、我が教會を取除けてはどうであるか？露西亞人は自分の土地から逃げ出さなくてはならない。露西亞の土地に韃靼人といふ弟が住んでゐるが爲に、聞えないやうに、又見えないやうに、どこか机の下へでも匍ひ込まなければならぬ。

あなたは「探偵」といふことに就て何か言はれてゐる。『我々は露西亞人でない露西亞人たる感情の一部に依つて探偵が暴露してゐるやうなもの(新聞の論説)を指摘しなければならぬ。この悪い習癖は、遺憾ながら、未だに我々を離れない。然るに、説かれたる事の実質から推して、一般の露西亞民族に這入つてゐる諸民族に關しては特別の慎重を要したものである。』と。それはどういふ習癖であるか？臆面なく申上けるが、これは歐羅巴から輸入した自由思想の意味が解らない、歐羅巴かぶれの舊い理論家が常に用ゐる胡魔化しの教書に過ぎないので。いや、あなたがたと我々と一緒になつて民衆に信教上の忍耐を教へたり、良心(信教の自由と同意)の自由に就て説教したりする必要はないのです。この義に於ては、民衆があなたがたにも、歐羅巴にも教へて呉れるのです。但し、あなたは新聞に就て、露西亞の言論界に就て語つてゐられるが、探索といふのはどんなものですか？そのやうにあなたが懺悔してゐられる、そのやうに根を張つた習癖とはどんなものですか？だが、これも現實に依つて立證することの出来ない理想的自由主義の空想である。申上げますが、露西亞では未だ嘗て、信教に就ても、その土地土地の愛國的感情に就ても、文學の中で何人をも密告したものは無い。たとも個々の場合はあつたとしても、それは極めて孤立し

た例外に過ぎないから、それを『この習癖は、未だに、我々を離れない。』などといふ總則の中に據ぎ上げるのは罪惡であり、恥かしいことである。一體、密告した探偵とかいふのは何のことであるか？既に語るべきでない事實といふものがある。あなたは如何なる評論を指して言つてゐるのか、又何を暗示しやうとしてゐるのか知らない。私はどこかで高架索に始まり掛けた狂信の騒ぎに就て讀んだ憶えがある。それ御覽なさい、あなた自身がたつた今かういふ騒ぎを實際に行はれた事實として書かれたではありませんか。又土耳其から狂信の説教者がクリミアに入り込んだといふことである。けれど、かういふ騒ぎが實際にあったか、或は毫しもなくかつたが、私は、現在の場合、その詮議は止めることにする、又實を言へば、自分も知らない。只あなたに質ねることは、若しや何れかの新聞がかやうな噂——或は既に事實かも知れないが——を報道したとしても、それを以て『我が異宗教徒の感情の一部に依る探偵』と、名づけることが出来るだらうか！假りにかういふ騒ぎの事實が眞個にあつたとして、事實を報ずるを以て務めとしてゐる新聞がどうしてそれを黙つて置かう。新聞はそれを以て危険を警戒してゐるのではないか。若し黙つてゐて、事件即ち狂信を發展させるやうでは、狂信者も酷い目に會へば、その傍に住んでゐる露西亞人も傍杖を喰はなければならぬではないか。されば若しも新聞が政府に密告して追跡を促す爲に故意から胡魔化しの事實を掲げるならば、その時は、勿論、探偵もあらうし、密告もあるだらう、併し、若しも事實が眞ならば、それを黙つてゐるよものだらうか？一體、露西亞の誰が、又何時異民族を、その信教を理由として、又その異なつた「宗教感情」を理由として、將又單に最も廣い意味の感情を理由として、彼等を追窮したか？却つて、かういふことに就ては、露西亞では何時代でも極めて弱々しく、歐羅巴の他の文明國とは全

く趣を異にしてゐたのである。宗教感情に就て見るも、今ではもう、ラスコリニキ（正教から生じた異宗派の人々。無僧宗、去勢宗等。）を追窮する者はない、異民族に就ては言はずもがなである。近頃、後にも先にもたつた一度、シツンヂスト（正教の儀式、偶像や権力の崇拜、一切の祕密などを排斥する合理派の一派）で、聖書を遵奉する正義の生活を要求す。の追跡が行はれたが、その事件は忽ち露西亞ちうの新聞から酷烈な非難を蒙つた。序でだが、我々が婆羅地方の獨逸人をその信教と感情とから追跡するといつて我々を責めた——今でも責めてゐる或る種の獨逸新聞に同意することが出来やうか？あなたが、どういふ探偵に就て語られてゐるのかが正確に解らやうに論文を指摘せず、又事實を擧げて呉れなかつたことは非常に残念である。言葉の使ひ方を辨へなくてはならない、探偵などといふ言葉を以て巫山けてはならない。

要するに、あなたにはこの「同宗」といふ口實が氣に入らないのだ。同宗からでなく、他の動機から助けろと言はれるのだ。けれども、第一、この「動機」は作つたものでもなければ、探したものでもない、獨りでに現れたもので、又萬人が一齊に唱へたものである。これは歴史的動機である、その歴史は今日まで連綿として續いてゐる。「不斷」に「我が同宗者」といふことを口にして、スラヴ民族の爲の運動に宗教的の性質を加へてはならぬ。」と、書かれてゐる。だが、歴史と生きた生活とを何とすることが出来やう。加へべきか加へてはならぬかは獨りではさうなつて來るものである。よく考へて御覽なさい、土耳其人はスラヴが基督教徒でありながら、土耳其人と平等の権利を得やうなどとするといふのでスラヴ人を虐殺するのである。勃牙利人が回教に移つたとしたならば、土耳其人は直ぐに迫害を歇めて、コオランに依つて

自分たちと同様に認めるのであらう。従つて、勃牙人があのやうに残忍な苦患を蒙つてゐるのは、それは、勿論、彼等の基督教が崇つてゐるのである、これは白日の様に明かなことである。されば露西人は、スラヴ人の犠牲になるに及んで、どうして「宗教の問題」を避けられるやう。又露西人は避けやうなどは考へもしまし。且、露西亞の人間は、歴史上や現在の重大事を除いては、基督教より高いものは何にも知らない、又想像することも出来得ない。露西亞人は自分の全土を、自分の全社會を全露西亞を基督教と同音の「農 民」と名づけたのである。正教の眞髓を洞察して御覽なさい、これは單なる教會や儀式ではない、我が民衆に取つてそれがなくては、露西亞の諸民族が生きてゐられない根本活力の一となつた生きた感情である。露西亞の基督教には、その實質に於て、神祕主義さへもない、只人間愛がある許りである、基督の姿がある許りである——少くとも、それが主なるものである。歐羅巴では久しい前からクレリカリズム（宗教界に俗人の權力を増大せんとする傾向。）と教會とに對して虞れを抱いてゐる。或る地方では、生きた生活の流れを妨げ、生活の繁榮を妨げ、宗教そのものを妨げてゐる。けれど、我が靜寂な、隠和な正教は闇黒な、陰險な、偏見に充ちた、奸譎な残酷な歐羅巴のクレリカリズムと選ぶところがないだらうか？ どうして我が正教は民衆に近接せざるを得やう？ 民衆の主張は全體の民衆に依つて創られるもので、「べきとかべからずとか。」と雜誌の編輯所で作られるものではない、實際にあるが儘になつて行くのである。あなたは其の先に、「俠氣ある自由の事業は軍隊の中にその擁護者たる露西亞人を見出した。同宗と同種などに依る同情よりも更に進んだ、この見地から見ると、スラヴの事業は神聖な事業である。」と、書かれてゐる。あなたの言はれる通り、それは崇高な動機である。けれど、又同宗の動機は何を語るであらう？

今の場合、同宗は不幸な、磔に處せられてゐる者を意味する。その蒙れる迫害から私が憤慨してゐるのである。これは即ち「虐けられた者の爲に、近人の爲に命を献けろ、それより崇高な義舉はない。」といふことである——これ同宗の動機が語るものである。尙、一般に善事の爲に「口實」を索めることは危険だといふことを一言して置く。例へば、私が同宗者としてスラヴ人を助けるとすれば、それは決して口實ではない、單に「彼等は同宗者である、従つて、基督教徒である、それが爲に彼等は虐けられ、苦しめられてゐるのである」と、いふ彼等の歴史的状態を意味するものである。けれど、若しも私が「俠氣ある自由の事業」から助けると言ふならば、どうして私の援助の理由を標榜する事が出来やう。既に理由を索めるとすれば、誰よりも多く自由の俠氣ある探索を表明した黒山人やヘルツェゴヴィナ人は誰よりも權威ある援助を示す譯になる、塞耳維人は極く鮮く、勃牙利の男女は、どこかの山間で初めのうち、無力の蠢動を見せた許りで、殆ど自由の爲に起さなかつたのである。只、殘虐者が父母の眼前で子供等の指を斬つて、（子供の苦痛を長びかせる爲に、五分間位づつかかつて）父母はこれを防ぐに由なく、狂氣の如くに喚きつ藻掻きつ、哀れな子供等を苦しめるのを止めて、自分たちに返して貰ひたいばかりに、殘虐者の足に接吻してゐた時に助け、彼等は哮えてゐた許りである。これではどうして他人を助ける譯には行かないであらう。何故ならば、彼等は酷い目に會つた許りで、「この、人間の第一の幸福」といふ自由の事業に携るまでは意氣が昂らなかつたから。假にあなたがあんなに悪く考へずに、人間愛の爲といふ理由と「動機」とを容れたなら、いくらかこれに似た考察と結論に達するものであることを悟るであらう。一番いふのは、人間は不幸であるから助けることである。同宗者を助けるとは即ち茲を言つたものである。繰返して言ふ

が、露西亞で同宗者といふ言葉はクレリカリズムの口實ではない、單なる歴史的の意義を表示するものである。「同宗」なるものは俠氣ある、又偉大なる自由の事業を非常を愛するものであり、又尊重するものである。のみならず、必要となれば、それが爲に死ぬのを厭はないのである。とは言へ、私は上に陳べたことを以て歐羅巴思想を露西亞の現實に間違つて適用することに反對したのに過ぎない。

四 恐怖と憂慮

最も滑稽に思はれるのは、我が名譽ある理論家が、スラヴ人の爲といふ世間の惑溺から、我々に取つて由々しき危険を無視し、全力を竭して我々に警告しやうと焦つてゐることである。彼は、我々自己瞞着の時節柄、自分に「成熟證書」を授與して煖爐に上つて眠らうと思つてゐると思つてゐるのである。彼は次のやうに書いてゐる……

……「この意味に於て、スラヴ人の爲の犠牲といふことに關して吾人が屢々眼にする「是等の事實は露西亞の社會に憚るべき活氣を煥發してゐるが、それは露西亞の社會が成熟したことを證明するものである。」云云といふテエマの考察は何れも危険である。國際問題や民族に對する同情の發現に基由して鏡に向つて自分に見惚れたり、自分の義務を果したへた勤勞者の夢を以つて眠らうとしたりする傾きが極めて多いから、かういふ考察は、或る程度までは正しいかも知れないが絶対に危険である。見よ、我々は、クリミヤ戰爭の始めに際し、我々が犠牲を吝しまない覺悟あることを宣揚し、千八百六十三年に於ける我が宰相の

通告に基由し、北亞米利加戰艦の士官に示した同情ある歡迎に基由し、カンチオット人の爲の募集に基由し、又彼得堡と莫斯科とに於けるスラヴ文學者に對する表彰に基由して我々の社會的成熟を祝賀したではないか。その頃新聞に書かれた事を讀み返して見給へ、さすれば、或る辭句は今日文字通りに繰返されてゐることが解るから。我々が順々に祝賀して來た所の「成熟」から何が生じたか、又我々がそれを祝賀した所の時代は我々を進歩させたかは自らに問はん……併し、我々は一種の引力に牽き摺られてゐるので、まだ「成熟證書」の授與を催促する權力がないことを記憶しなければならぬ」……。

第一に、右の論は、最初から最後まで、現實と違つてゐる。「自分の義務を果して了へた勤勞者の夢を以て眠らうとする傾きが、我々の中には極めて多い。」云云と言はれるが、この「睡眠を欲する傾き」は只々饒舌を好んで、何事をなすことも欲せず、常に煖爐の上に安臥し、煖爐の上から教訓を論じ、自分の美に陶醉して、不斷に自分を鏡に眺めてゐた陳腐な理論家の最も偏つた、間違つた非難の一つである。この偏つた、それが今では驚くべき程に役所風になつた非難は、或は露西亞人が煖爐の上に安臥し、或は歌留多にのみ耽つてゐた時に生れたのであるが、その安逸と見えることは何事もさせて呉れず、何事もさせるやうに仕向けて呉れず、又することを禁じられてゐたからこそ現れた現象である。

けれど、是等の障壁が除かれるや否や、露西亞人は煖爐にのたうなどといふ望みをさらりと棄て、仕事に對する欣求に就て熱烈な不安と焦慮とを示し、仕事に就て不撓なことを表すに至つた。若しもその仕事に未だに思ふやうに進まないとすれば、それは仕事をやつてゐないからではなく、二百年も仕事といふ仕事から離れてゐたので、一朝や一夕には仕事を理解し、仕事に着手する能力が得られないからに歸因す

る。貴方には古い記憶を辿つて、訓言でも讀んだり、露西亞人を罵つたりしてゐればいゝのでせう。私は未だ嘗て、自分の偉大なところから、露西亞の生活を深察せず、自分の古い古い偏見を檢覈し、訂正する爲にでも、その中に何ものかを研究しやうとは、未だ嘗てしたことのない古い理論家に言つてゐるのである。

けれど、キプア・モキエウイチ(舊い理論家のタイビカルな人物)に相當な憂慮は「成熟證書」に就ての憂慮である。我々は自分に成熟證書を授與し、安心して眠つて仕舞ふと言ふ。これは全く反對で、疾うの昔に、自分に成熟證書を授與し、自己陶醉と訓言讀みと甘い半睡とに傾いてゐる理論主義に過ぎないものである。而して、本年に於けるが如き、全會社を擧つての若い、美しい結合運動は行く末の繁榮と完成とに向つて呼喚する力がある。かういふ時代は慈愛の跡を残すものである。一體、貴方はどこから、露西亞の社會は、自己裝飾と鏡に向つてする己惚とに傾いてゐるといふ結論をすることが出来ましたか？凡ての事實はそれに裏切つてゐるではありませんか。否、これは世界ぢうで、自分に對して最も信じ易くない、最も苛酷に自分を打擲する社會である！我々はスラヴ人に同情したのみではなく、農民をも解放した。見よ、露西亞民族の歴史に於て、この二十年來の露西亞生活ほど、懷疑の眼を以て自己を檢覈した時代があるか？自己に對する不信に於て、我々はこの年月、病的な、極端に、許すべからざる程の自己に對する嘲笑に、不當な程の自己に對する侮蔑に達し、我々の完全に自ら陶醉するなどは餘りに、餘りに遠かつた。我々はカンチオット人に同情し、戰艦を歓迎し、常に自己の成熟に就て書いてゐたが、その成熟から何事も生じなかつたと言はれる。かくして、貴方は單に露西亞ばかりでなく、世界の生活の最もありふれた現

象さへも理解しなくなつてゐるのだ。

若しも我々が自分の進歩を多少の誇張を以て喜んだとすれば、それは若くて、生きやうと欣求する、未だ餘りに人生を信じ、自分の使命を眞面目に見てゐる社會にはあたり前のことである！これはどこでも、又いつでも、各々の國民につき纏つてゐることである。世界に昔からある書物の何れかを取つて見よ、すれば、自分の進歩に對してこれと同様な、最初の、若々しい歡喜は世界に於ける大古の國民にもあつた特性である。従つて、それらの國民が若くて、生命と將來とに充ちてゐればといふ條件の下には、世界の開闢以來、存在してゐたのである。我々が自分たちの進歩と我々が遂に歌留多を棄て、仕事に従事するやうになつたことゝに對する喜びは幾らか早過ぎた嫌はあるかも知れないが、それは警戒者が戰々として我々に警告してゐる程に危険なことだらうか？否、かやうな眞心を以て、眞面目に、且、喜んで眞の生きた生活を探へた是等の人々こそ、自讀心から自分に催眠を許すやうなことはしないのである。一度目覺まされ、熱泉のやうに迸り出した生活は止まることを知らないもので、自己陶醉は忽ちに消散し、それが強ければ強かつた程、前へ前へ進まうとする救ひの覺醒は正しくなつて来る。けれど、覺醒するとはいへ、我々は今までの若い、麗はしい、無邪氣な救ひの歡喜を尊ぶであらう。貴方は『その成熟から何が生じたか。』と問はれてゐる。だがどうして何がです、恐らく、現在の時代が生じたのです。スラヴの客人を遇するに際してもクリイト人との感激がなかつたならば、今日に於て何ものも得る所はなかつたらう。社會は眞面目になつて、時代の思想や學理を知るやうになつた。失禮ですが、凡ての事は段々と世間に行はれ、どの民族も段々と目鼻を生ずるので、初めから小さなベダンチストとして生れるものではありません。運動に

濁れ過ぎる。』なんて何を貴方は立腹してゐられるのですか、けれど、早熟した惘發や、老人の役目を演ずる青年たちのベダンチズムはもつと危険なものである。貴方は生きた運動などは好まれないで空論を好まれる。だがそれは貴方の趣味だから何としよう。おゝ、勿論、貴方は歐羅巴に就て言つてゐられる。『佛蘭西が伊太利の爲にしたことは我々が、今、スラヴ人の爲にしてゐることは違つてゐるが、果して佛蘭西の社會は、伊太利を解放した後、自分たちが前よりも成熟したと思ふやうになつたであらうか？』と、貴方は書いてゐられる。けれど、そんなことは、もう、手から送り落ちて仕舞つて、從順の例として我々に示すべき者を見出してゐられる。佛蘭西をでせう？だが佛蘭西人は自分の姿を鏡に映さなかつたか？我と自らに見惚れやうとはしなかつたか？ナポレオン一世の時、例へば、彼等は傲慢なる態度と極度の得意と幸福がりやらとで歐羅巴ぢうの憎惡を招いた。千八百七十一年までは、彼等の實際はさういふ風であつた。けれど、今の佛蘭西はその内部が極度に分裂してゐるので、右の見地からこれを觀察することは困難である。併し、英吉利人や、殊に獨逸人に就てはどういふ意見を持つてゐられますか？殊に獨逸人は自分の姿を鏡に映したり、自慢したりすることは好まれませんからね？そこで『佛蘭西が伊太利の爲に盡してゐることは我々がスラヴ人の爲に盡してゐることゝは違ふ。』と、いふ歴史的の結論は何と正しいでせう。申上げますが、一體、佛蘭西は伊太利の爲には殆ど何にもしてゐないので。ナポレオン三世が北伊太利を解放したのは政治上の商量からで、佛蘭西國民がナポレオン三世がなく、政治上の商量がなくて、自分から伊太利を解放したであらうか、全く不明である。少くとも、この解放が、或る種の政治的攻略の爲でなく、伊太利人の解放の爲にのみ行はれたらうか頗る斷じ難い。ナポレオン三世も、佛蘭西自身も、その後に至

つては、彼等を瞞した嫌のあるカヴールの義舉を大なる歡喜の眼を以て眺めなくなつた様に我々は思はれる。そして、伊太利人が羅馬に野心を抱いてゐるといふて佛蘭西政府が「Jarnais」(決してない)の叫びを揚げた時、佛蘭西國民は、恐らく、この「Jarnais」に同情を以て傾聴したのであらう。おゝ、勿論、佛蘭西が伊太利に盡したことは我々が今スラヴ人に盡してゐるよりも多いに違ひない、我々の事業はまだ終らない、今後の結果はどうなるか知れない、けれど、愛に満ち、高潔な獻身の義舉によつて固められてゐる、露西亞人のスラヴ人の爲の運動がナポレオン三世の伊太利解放のやうな高尚な、教訓的な、義勇の龜鑑を要したとは受取り難いことである。併し、貴方が、匈牙利人をさへも寛大の龜鑑として露西亞國民に示さうとされるのを如何せん。取分けて今は、匈牙利人が美しく、且寛大なのでせう？スラヴ人の身上を樂にしやうといふ思想に對して、彼等は何といふ狭い憎惡を抱いてゐるのだらう！露西亞に對する憎惡はどうだらう！どうしてかういふ例とかういふ國民が貴方の頭に舞ひ込んだのです。

五 Post-scriptum.(拉典語、追伸)

繰返して言ふが、私はこんなに擴がつてしまつたことを遺憾に思ふ、だが併し、無論賢明にして善良な、けれど幾らか舊い筆者の極めて無邪氣な、以上の言葉には、以上の言葉が發せられてゐる調子の中には、恐らく、非常に近い、又よくない將來の聲が聞かれたやうに思はれるに因つて、私は怵へることが出来なかつたのである……おゝ、勿論、是等のあり得べき、將來の聲は「歐羅巴」時報の聲とは毫しも共通した

ものは持つてゐないが、その聲が、何故か、私には聞かれたのである。眞個に、この善良等、儀義ある、スラヴの爲めの露西亞運動が、事情の力を以て、何の功果をも齎さず、この事業が成功せず、衆人が騒ぎ廻つて、緘黙するのが落ちであるやうなことになるものなら、お、その時は、我々は如何に勝ち誇つた得意の調子を持つた如何なる叫びを聞くであらう、それこそ、無邪氣でない、勝利を祝ふ嘲笑と侮蔑の言葉を耳にするであらう！今こそ暫くは鳴りを鎮めてゐるが、或は既に「立派な衝動」に諧音を歌ひ始めた聲は、その時こそ、自由に響き渡るであらう。この立派な衝動の面前で哄笑が起るであらう、そして立派な衝動を有つた人々は羞かしくなつて、鎮まつて仕舞ふであらう、そして多くの人々は「これは始めつから氣がつかなければならなかつた。」と、説くので、哀れな者はそれを信じて仕舞ふ。

「さあ、さういふ信念のあつたものは何を得た！」と、勝つた者は喚くだらう、「お前たちの團結から、お前たちの「結びつける思想」から何が現れたか？」豪い人には鼻があつた！賢者はどんな結末になるか始めから知つてゐた、果して何等か得る所があつたか？中身を食つて仕舞つた卵にも劣つた事だ。我と自らに成熟證書を書いて與へたのだ。諸君は今、前よりも成熟してゐるか？いや、兄弟、隅の方へ引つ込め、そして前のやうにおとなしくしてゐろ——その方が物事はうまく行くから！」かういふことが聞かれるやうになるだらう、併し、まだまだ書切れないことは澤山にある。かくて再びどれ丈けのシニズムを見、自己の力と露西亞とに對してどんなに絶望することだらう。再び露西亞を弔ひ始める！どれ丈けのハートのジャックが現れるだらう！心の清淨な青年は再び社會の埒外に走り、再び分裂と動搖とが將徠する！序でだが、ビコンスフィールド子爵は、我が破壊分子を云云するに際して、偽りを言つてゐることは自分でも承

知してゐるのである。そのみか、恐らく、破壊分子が我々にあるとすれば、今や露西亞の新しい衝動が起ると共に、異なつた方向を取らなければならぬことを豫感してゐたのである——だが、さういふ商量は毒蜘蛛子爵には殘念で堪らないのだ。今、即ち「衝動」の失敗する場合は、毒蜘蛛は雀躍りして喜ぶに違ひない——彼は既に喜ぶべきことを承知してゐる！けれど……けれど、果してこれは眞實に近いだらうか？果してこれはものになるだらうか？何といふ悪い夢だらう！夢である、そして夢に過ぎない……

集全一キスフエイトスド

卷九第

不許
複製

大正九年九月廿五日印刷
大正九年九月三十日發行

非
品
賣

發行所	編輯兼發行人
東京市麹町區 三番町二八番地	ドストイエフスキ全集刊行會
ドストイエフスキ全集刊行會	右代表者 植村宋一
電話九段一五二二番 郵政東京四三五四番	谷口熊之助
	冬夏社工場
	東京市牛久保區早稲田橋町三六二番地

375
47

終

